三重県埋蔵文化財調査報告　87－9

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

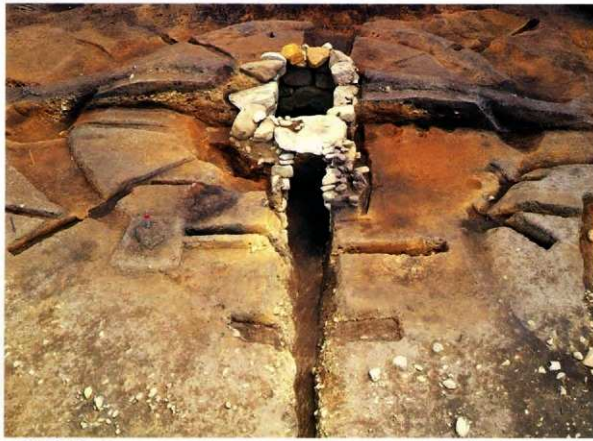
第 3 分 冊　3

天 保 古 墳 群

1991・3

三 重 県 教 育 委 員 会
三重県埋蔵文化財センター

調査区全景（南上空から）



1 号墳石室（南から）

1 号墳出土遺物

例　　言

1.　本書は平成２年度に三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第８次区間（久居～勢和）建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書のうち、天保古墳群の調査報告書（第３分冊３）である。

2.　調査（整理・報告書作成業務）にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3.　調査（整理・報告書作成業務）の体制は下記のとおりである。

・調査主体　三重県教育委員会
・調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第２課第１係

次長兼調査第２課長		山澤義貴
	主査	新田　洋　・　主事　河北秀実
	主事	増田安生　・　主事　齋藤直樹
	技師	大川勝宏　・　主事　伊藤裕偉
	主事	角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）
	主事	稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）
	主事	前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）
管理指導課	主事	小坂宣広　・主事　江尻　健
		川崎正幸（臨時調査員）・反町愛子
		栄野妙子・谷久保美知代・吉村道子
		山分孝子・白石みよ子・乾ひとみ
		竹内由美・上村かおり・中山学・反町有子（室内整理員）
		森田幸伸（皇學館大学学生）
		近藤大典（皇學館大学学生）

4.　本書作成にかかる各整理は上記体制で行い、報文の執筆分担については目次及び各文末にも明記した。
　なお、発掘調査担当者であった野田修久氏（現多気郡明和町上御糸小学校教諭）には、報文執筆の一部をお願いした。
　また、遺物整理、報文執筆にあたっては、下記の方々からご指導、助言を賜わった。記して謝意を表する。
（順不同、敬称略）
　八　賀　　晋　（三重大学教授）
　西　山　要　一　（奈良大学助教授）

5.　天保古墳群については、既に刊行の「近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」（1988.3）、「同Ⅴ」（1989.3）にその調査概要を公表しているが、本書をもって最終的な報告とする。

6.　天保古墳群の記録類、出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7.　遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

8.　スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

例　　言
目　　次
図 版 目 次
挿 図 目 次
表　目　次

前　言 ……（前川　嘉宏）
1．調査の経過 …… 1
2．調査および整理の方法 …… 1
3．調査の体制 …… 1

天保古墳群 ……（前川　嘉宏・野田　修久）
1．はじめに …… 7
2．位置と歴史的環境 …… 7
3．古墳群の概要 …… 7
4．古墳各説 …… 11
5．結　語 …… 37

（付　編）
天保3号墳土壌分析結果報告 ……（広瀬和久・原　正之）…… 61

図 版 目 次

PL. 1　調査区全景 …… 39
　1号墳調査前全景
PL. 2　〃　表土除去後全景 …… 40
　〃　羨道と閉塞石
PL. 3　〃　羨道と閉塞石 …… 41
　〃　閉塞石最下段
PL. 4　〃　玄門 …… 42
　〃　奥壁
PL. 5　〃　奥壁と東側壁 …… 43
　〃　奥壁と西側壁
PL. 6　〃　墳丘断ち割り後全景 …… 44
　〃　墳丘断ち割り後全景
PL. 7　〃　天井石除去後石室全景 …… 45
　〃　天井石除去後石室全景
PL. 8　〃　羨道東側壁 …… 46
　〃　墳丘土層断面
PL. 9　〃　杏葉・雲珠出土状況 …… 47
　〃　石室材除去作業
PL. 10　〃　石室基底石全景 …… 48
　〃　石室基底石全景
PL. 11　1号墳石室掘形全景 …… 49
　嬉野町立嬉野中学校校庭へ移築中の
　1号墳石室
PL. 12　3号墳全景 …… 50
　〃　石室全景
PL. 13　〃　須恵器杯身・耳環出土状況 …… 51
　〃　床土除去後の石室全景
PL. 14　5号墳石室全景 …… 52
　〃　石室全景
PL. 15　6号墳石室全景 …… 53
　〃　石室基底石全景
PL. 16　〃　玄室全景 …… 54
　7号墳全景
PL. 17　〃　石室掘形全景 …… 55
　8号墳全景
PL. 18　1号墳出土遺物 …… 56
PL. 19　〃　出土遺物 …… 57
PL. 20　〃　出土遺物 …… 58
PL. 21　〃　出土遺物 …… 59
PL. 22　調査古墳出土遺物 …… 60

挿 図 目 次

第1図　遺跡位置図（1） …… 3
第2図　遺跡位置図（2） …… 4
第3図　調査区位置図 …… 8
第4図　調査前地形測量図 …… 9
第5図　調査古墳測量図 …… 10
第6図　1号墳・5号墳・7号墳外形測量図 …… 11
第7図　1号墳墳丘断面図 …… 12
第8図　1号墳基底面測量図 …… 12
第9図　1号墳石室実測図（1） …… 13・14
第10図　1号墳石室実測図（2） …… 16
第11図　1号墳石室実測図（3） …… 17
第12図　杏葉・雲珠出土状況実測図 …… 17
第13図　1号墳石室の石材重量 …… 18
第14図　1号墳出土遺物実測図（1） …… 20
第15図　1号墳出土遺物実測図（2） …… 21
第16図　1号墳出土遺物実測図（3） …… 22
第17図　1号墳出土遺物実測図（4） …… 23
第18図　1号墳出土遺物実測図（5） …… 24
第19図　1号墳出土遺物実測図（6） …… 25
第20図　3号墳外形測量図 …… 28
第21図　3号墳石室実測図 …… 29
第22図　3号墳遺物出土状況実測図 …… 29
第23図　3号墳出土遺物実測図 …… 30
第24図　5号墳石室実測図 …… 30
第25図　5号墳出土遺物実測図 …… 30
第26図　6号墳・7号墳外形測量図 …… 31
第27図　6号墳石室実測図（1） …… 32
第28図　6号墳石室実測図（2） …… 33

第29図　6号墳遺物出土状況実測図 …… 33
第30図　6号墳出土遺物実測図 …… 34
第31図　7号墳石室実測図 …… 35
第32図　7号墳出土遺物実測図 …… 36
第33図　8号墳外形測量図 …… 36
第34図　8号墳出土遺物実測図 …… 37

表　目　次

第1表　発掘調査遺跡一覧 …… 5～6
第2表　天保古墳群一覧 …… 8
第3表　1号墳出土土器一覧 …… 26
第4表　1号墳出土ガラス小玉一覧 …… 26
第5表　1号墳出土遺物一覧 …… 27
第6表　3号墳・6号墳・8号墳
出土土器一覧 …… 34
第7表　3号墳・5号墳・7号墳・8号墳
出土装身具一覧 …… 34
第8表　三重県内の杏葉・鞦・胡禄・鈴子
出土古墳一覧 …… 38

前　　言

1．調査の経過

本書に掲載した天保古墳群の発掘調査は、昭和62年度および63年度に実施した。

近畿自動車道関・伊勢線第８次区間（久居～勢和）にかかる埋蔵文化財発掘調査は、昭和59年度に現地調査を開始し、昭和61年度内には多気郡多気町地内の全ての遺跡と松阪市地内のほとんどの遺跡の発掘調査を終了し、久居市、一志郡嬉野町地内の第１次調査に入った。

昭和62年度からは調査地の重点を久居市、一志郡一志町・嬉野町地内に移し、戸木遺跡、鳥居本遺跡、天保遺跡、天保古墳群、堀之内遺跡などの調査を実施した。昭和63年度は前年度から継続している遺跡の調査を中心に行い、第８次区間内にある遺跡の現地調査を終了した。

なお、用地の追加買収によって天保古墳群に隣接する土地の試掘調査のみ平成元年度にもちこされ、同年５月に終了した。

調査にあたっては日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、並びに、地元の各関係機関、地元自治会など各位より惜しみない援助を受けた。また、現地発掘調査にあたっては三重県土地開発公社よりひとかたならぬ力添えがあった。ともに記して心より感謝申し上げる。

2．調査および整理の方法

現地調査の方法については第１分冊を参照されたい。また。資料整理も第１分冊に示した方法により実施したのでここでは略する。天保古墳群の遺構実測図の整理番号は10-0001～10-0108、遺物実測図の整理番号は10-0001～10-0164である。

3．調査の体制

調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課が担当した。

以下は昭和62・63年度の調査体制である。なお、平成元年度に実施した天保古墳群隣接地の試掘調査については三重県埋蔵文化財センター調査第２課主査新田洋が行った。

昭和62年度

文化財第二係長	伊藤久嗣	総括	
技　　師	新田　洋	調整・協議、焼野遺跡ほか	
主　　事	山下雅春	戸木遺跡ほか	
〃	田中喜久雄	戸木遺跡	
〃	河北秀実	堀之内遺跡ほか	
〃	増田安生	天保遺跡ほか	
〃	田村陽一	天保遺跡ほか	
主　　事	宮田勝功	鳥居本遺跡ほか	
〃	野田修久	天保古墳群ほか	
臨時調査員	木許　守		
室内整理員	谷久保美知代		
〃	近藤豊美		
〃	山本紀子		
〃	大西友子		
〃	野崎栄子		

室内整理員	中谷とも代	
〃	東千恵子	
〃	山際みち子	
〃	孝久山希子	

昭和63年度

文化財第二係長	伊藤久嗣	総括
技師	新田　洋	調整・協議、西野7号墳
主事	田中喜久雄	
〃	河北秀実	島居本遺跡
〃	田村陽一	堀之内遺跡
〃	小坂直広	ビハノ谷遺跡ほか
〃	山崎恒哉	西野7号墳
〃	野田修久	天保古墳群ほか
室内整理員	谷久保美知代	
〃	近藤豊美	
〃	大西友子	
〃	野崎栄子	
〃	東千恵子	
〃	山際みち子	
〃	孝久由希子	
〃	小坂規美子	

調査指導（昭和62・63年度、順不同、敬称略）

木下正史（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室長）

大脇　潔（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官）

千葉　豊（京都大学埋蔵文化財調査研究センター助手）

八賀　晋（三重大学教授）

三辻利一（奈良教育大学教授）

堅田　直（帝塚山大学教授）

伊藤秋男（南山大学教授）

西山要一（奈良大学助教授）

安孫子昭二（東京都文化課学芸員）

石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）

小玉道明（三重県総務部学事文書課主幹）

広瀬和久（三重県農業技術センター環境調査研究室室長）

原　正之（三重県農業技術センター研究員）

磯部　克（三重県立津西高校教諭）

奥　義次（度会町教育委員会）

発掘調査土木工事部門担当

三重県土地開発公社

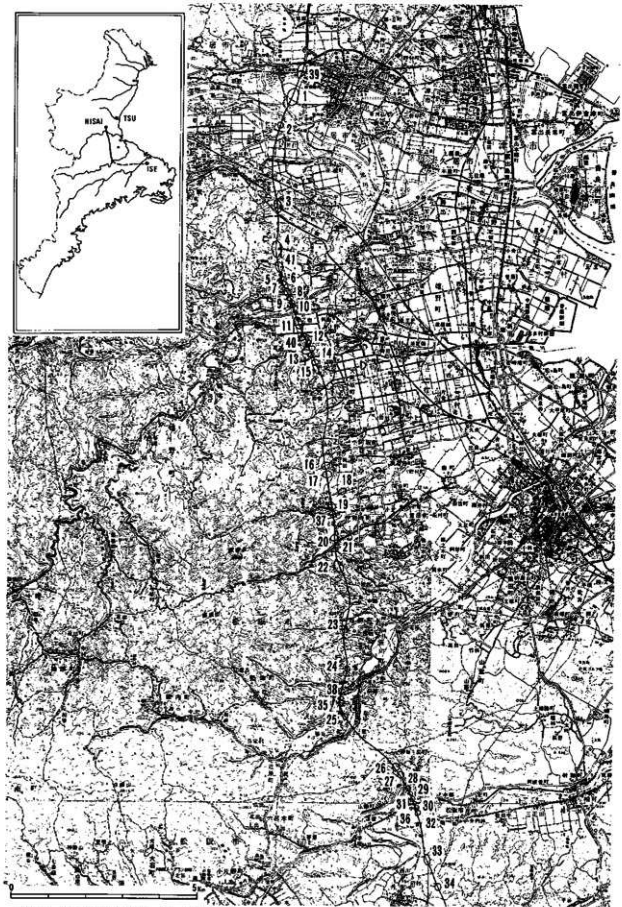
堀内　信吾

福場　庄衛

浜口　安光

中田　辰実

（前川　嘉宏）



第1図　遺跡位置図（1）（1：100,000）

第2図　遺跡位置図（2）（1：25,000）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)		調査期間(元号は昭和)	担当者	概要
1	小戸木遺跡	久居市小戸木町	192	計 432	62. 3. 3～ 3. 5	宮田 勝功	遺構・遺物なし(試掘)
			240		62. 9.20～ 9.24	木許 守	〃 (〃)
2	庄村遺跡	一志町庄村		304	62. 9.14～ 9.20	新田 洋	遺構なし・遺物微量(試掘)
3	島居本(八反田)遺跡	一志町小山、新沢田	8,900	11,540	62. 9.24～63. 3. 7	宮田 勝功	弥生中期方形周溝墓など検出
			2,640		63. 5.16～ 7.27	小椋 宣広 河北 秀実	飛鳥時代の井戸検出
4	西野(天花寺)古墳群	嬉野町天花寺		3,400	62.11. 9～11.31	新田 洋	(山林伐開)
					63. 5.16～ 9.28	新田 洋 山崎 恢政	石釧・車輪石片出土、前期の古墳1基
5	姥野(口山田)古墳	嬉野町島田		2,010	62.7.11～ 9.30	山下 雅春	古墳は焼窯せによる盛土と判明、石棺出土(試掘)
6	姥野(口山田)遺跡	嬉野町島田		3,500	62. 5.11～ 8.24	宮田 勝功 新田 洋	奈良時代の竪穴住居跡など検出
7	天保(天保B)遺跡A・B区	嬉野町島田		7,200	62. 5. 7～ 9. 4	田村 陽一	平安時代の竪穴住居など検出
8	天保(一志西部)遺跡 C区	嬉野町島田		5,000	62. 5.18～ 6.30	増田 安生	奈良～平安時代の竪穴住居など検出
9	天保(天保松)遺跡 D区	嬉野町島田		3,800	62. 7. 1～ 8.12	増田 安生	〃
10	天保古墳群 (含、天保遺跡E区)	嬉野町島田		5,390	62. 8. 5～63. 7.12	田村 陽一 野田 修久	6世紀中ごろの横穴式石室墳など
11	堀之内遺跡 A区	嬉野町堀之内	1,450	14,250	62. 2.23～ 3.13	新田 洋	(側溝部分の調査)
	A区	〃	2,200		62. 5. 6～ 7.16	河北 秀実	古墳～平安時代の生活跡など検出
	B区	〃	2,200		62. 7.23～10. 1	河北 秀実	古墳～平安時代の溝など検出
	C区	嬉野町薬王寺	5,400		62. 9. 1～63. 3.19	増田 安生	弥生後期竪穴、平安の掘立柱建物など検出
	D区	〃	700		62.10.25～11.20	木許 守	古式土師器出土、ヤナ状遺構検出
	C区下層	〃	1,900		63. 5.18～ 8.13	田村 陽一	縄文中・後・晩期の土器多数出土
			400		62. 5.20, 6.29～ 7.22	河北 秀実	(調査区南端、北端部の試掘)
12	中見遺跡	嬉野町薬王寺	93	600	62. 3. 4	河北 秀実	(試掘)
			507		62. 5. 6～ 6. 5	河北 秀実	掘立柱建物3棟検出
13	直峡遺跡 (ビハノ谷古墳群)	嬉野町薬王寺・下之庄	1,000	13,000	62. 3. 2～ 3.30	野原 宏司	(山林伐開、資土盛相)
			12,000		62. 5.19～ 8.12	野田 修久 木許 守	弥生土器出土
14	女牛谷古墳群	松阪市小野町 嬉野町薬王寺・下之庄	4,031	7,171	61.12.15～62. 2.21	野原 宏司	(山林伐開、第1次調査)
			3,140		62. 5. 7～ 7.11	木許 守 野田 修久 山下 雅春	後期の古墳群
15	平田遺跡	松阪市小野町		228	61. 2.18～ 2.24	田村 陽一	遺構なし、遺物微量(試掘)
16	山見(下山見)遺跡	松阪市小阿坂町		224	60.11.12～11.20	野原 宏司	遺構なし、遺物微量(試掘)
17	新田遺跡	松阪市小阿坂町	288	4,688	60.11.15～11.25	野原 宏司	(試掘)
			4,400		60.12.27～61. 3.25	野原 宏司	縄文後期土器出土
18	坂内田古墳群 (坂内田遺跡)	松阪市岩内町	428	6,528	60.11.26～12.12	野原 宏司	(試掘)
			5,500		60.12.27～61. 3.25	吉水 康夫	横穴式石室墳を主体とする古墳群
			600		61. 6.30～ 7.30	野田 修久	
19	薮ノ下(岡崎古墳群)遺跡	松阪市岩内町	1,100	2,500	61. 3. 1～ 3.25	田村 陽一	(試掘)
			1,400		61. 6.30～10. 3	田村 陽一	良好な資料となる縄文後期土器多数出土
20	横兵遺跡	松阪市伊勢寺町	304	2,708	60.10.18～10.24	田村 陽一	(試掘)
			2,404		60.11.26～61. 3.18	河北 秀実	奈良～平安時代の竪穴住居検出

第1表　発掘調査遺跡一覧(太ゴッチクは本書所収遺跡)

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)		調査期間(元号は昭和)	担当者	概要
21	平林古墳群	松阪市伊勢寺町		計 4,021	61. 6. 9～10. 3	新田 洋 河北 秀実	石室を主体とする古墳群
22	横尾（西野）墳墓群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500 2,500	8,000	60. 7. 1～61. 2. 27 61. 5.31～12. 5	田阪 仁 宮田 勝効 田中喜久雄 宮田 勝効	500基におよぶ中世墓群 後期小形円墳（横穴式石室）2基 後期小形方墳（木棺）2基
23	きんざい林遺跡	松阪市西野町		176	60.10.25～10.26	田村 陽一	（試掘）
24	坂東（大河内5号）古墳	松阪市笹川町		180	61. 7.23～ 8.19	野田 修久	中世土器片散乱。古墳にあらず（試掘）
25	大河内城堀切	松阪市大河内町		600	62. 1. 5～ 2.25	宮田 勝効	中世北畠氏の平山城大河内城の堀切
26	上ノ広（森下地西方）遺跡	松阪市広瀬町	224 1,136	1,360	60. 3.22～60. 3.31 60. 7. 1～60.10.14	上村 安生 田阪 仁 宮田 勝効 田村 陽一 野原 宏司	（試掘） 弥生器末～縄文時代の石器多数出土
27	大原垣（大原垣南方）遺跡	松阪市広瀬町		114	60.10.28～60.10.31	田村 陽一	遺構、遺物微量（試掘）
28	花ノ木（山崎）遺跡	多気町牧	52 5,800	5,852	59.12.10 60. 1.28～60. 3.26	田村 陽一 杉谷 政樹 田村 陽一 杉谷 政樹	（試掘） 弥生時代中期竪穴住居、方形周溝墓など検出
29	浅間山北遺跡	多気町牧	44 1,000	1,044	59.12.10 60. 1.28～60. 2.23	高見 宜雄 田村 陽一 田阪 仁	（試掘） 土師器細片、天目茶碗片出土
30	浅間山南遺跡	多気町牧		470	60. 3.25～60. 3.31	河瀬 信幸 田村 陽一	遺構なし。遺物微量（弥生前期土器）（試掘）
31	牧丈窯群　1・2・3号窯	多気町牧	960		60. 7. 1～60.10.31	田中喜久雄 河北 秀実	奈良時代の瓦等用窯
	4・5・6・8号窯	多気町牧・銀形		1,160	60.11.30～61. 3.25	田中喜久雄	1号……平窯
	7号窯	多気町銀形	200		61. 6. 9～61. 8.15	野原 宏司	2～8号…登窯
32	釈迦寺（中牧）遺跡	多気町銀形	144 1,000	1,144	60.11. 1～60.11.12 60.12. 5～61. 2.28	田村 陽一 田村 陽一	（試掘） 掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88 7,500	7,588	59.12. 6～12. 8 60. 1.28～ 3.28	増田 安生 杉谷 政樹 吉水 康夫 河瀬 信幸 上村 安生	（試掘） 石器・石匙・山茶碗・瓦器片等出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生		44	59.12. 8～12. 9	増田 安生 杉谷 政樹	遺構・遺物なし（試掘）
35	菖谷遺跡	松阪市矢津町	740 4,700	5,440	61. 2.27～ 3.25 61. 8.20～62. 3.18	田阪 仁 野原 宏司 野田 修久	（試掘） 五輪塔など出土。寺（覚恩寺）跡の伝承に裏づけ
36	銀形（牧）中世墓群	多気町銀形		520	61. 7. 1～ 9. 6	野原 宏司	石組の中世墓13基検出
37	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岩内町		1,750	61. 9.20～11. 4	新田 洋	横穴式石室墳主体の古墳群
38	椿原外遺跡	松阪市矢津町		1,676	61. 9. 1～10.18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
39	久保屋敷（戸木）遺跡	久居市戸木町		12.000	62. 9. 1～63. 3.31	山下 雅巻 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、土壇状遺構など検出
40	ビハノ谷遺跡	嬉野町薬王寺		1,600	63. 4.11～ 5.11	小坂 宣広	古墳時代竪穴住居。鎌倉時代掘立柱建物検出
41	西野遺跡	嬉野町天花寺		2,473	63. 7.12～ 8. 3	野田 修久	古式土師器片出土（試掘）
	北広遺跡	嬉野町天花寺					サヌカイト製尖頭器片出土（試掘）

※調査総面積は151，715㎡、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

一志郡嬉野町島田　天保（てんぽ）古墳群　(10)

1．はじめに

天保古墳群は９基で構成される古墳群で、２号墳と８号墳が一志郡嬉野町島田字天保に、他の古墳が字上ノ垣内に所在する。今回発掘調査されたのは１号墳・３号墳・５号墳～８号墳の６基である。

天保古墳群の分布範囲は、縄文時代・古墳時代～平安時代の各時代の遺物の散布地である天保遺跡の範囲内にある。今回の天保古墳群の発掘調査も、天保遺跡Ｅ地区の調査の一貫として実施したが、遺跡の性格が全く異なるため、調査後の整理や報告書作成の作業は天保遺跡Ｅ地区と天保古墳群とを分離して進め、報告書も別分冊で発刊することにした。

天保古墳群の調査は昭和62(1987)年９月初旬から開始し、翌年の７月12日に終了した。調査面積は約1700㎡である。その後、近畿自動車道建設計画の設計変更により調査区の南東に隣接する土地が追加買収されたため、平成元(1989)年５月に調査面積158㎡の試掘調査を実施したが、この部分では遺構・遺物とも全く確認されなかった。

2．位置と歴史的環境

三重県と奈良県との県境にある三峰山（標高1235ｍ）の山頂付近に源を発する一級河川雲出川は、伊勢国のほぼ中央を西から東へと横断し、伊勢湾に注ぐ。雲出川の支流である二級河川中村川は一志郡嬉野町の南端にある高須ノ峰（標高798ｍ）に源を発し、嬉野町内を北東方向に流れて雲出川河口から約６kmの所で雲出川と合流する。天保古墳群は、この合流地点から中村川を約3.5km遡った左岸の河岸段丘上に所在する。

中村川流域は古墳時代において県内でも、最も先進的な地域の一つであったと考えられている。

県下で最も早く大型古墳が出現したのがこの地域で、古墳時代前期後半に前方後方墳が集中して築かれている。現在確認されている前方後方墳は嬉野町内の西山１号墳（全長43.6ｍ）、庵ノ門１号墳（全長37ｍ）、筒野１号墳（全長39.5ｍ）、錦山古墳（全長47ｍ）、嬉野町と松阪市との境にある向山古墳（全長71.4ｍ）の合計５基である。[9] これらの古墳の他にこの流域には西野７号墳（径約15ｍ）[10]、高取塚古墳（規模不明）[11]などの前期の円墳もみられる。

中期には中村川流域の南に位置する松阪市の坂内川流域に伊勢国で最大規模の前方後円墳である宝塚１号墳（全長95ｍ）が築かれる。一方、中村川流域の中期古墳にはヒトツコウベ古墳（径40ｍ程）などの大型円墳がみられるが、前期と比べて墳丘の規模は縮小し、その数も減少している。このことは、宝塚１号墳を築いた勢力が中村川流域に強い影響力を及ぼすようになった結果と考えられている。[12]

後期になると中村川流域は再び独自性を示すようになる。中村川左岸の丘陵尾根上にある釜生田古墳群では、５世紀末から６世紀初め頃に畿内型の横穴式石室を採用した古墳が築かれ始める。[13] これは、伊勢湾西岸地域では最も早い例である。

その後も、横穴式石室をもつ古墳は中村川左岸の丘陵を中心として、数基ないしは十数基の小グループを形成しながら７世紀中頃まで築かれている。

3．古墳群の概要

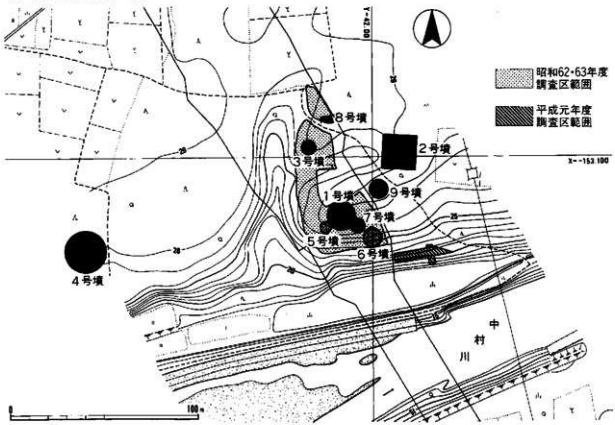
９基の古墳で構成される天保古墳群は標高約25～28ｍの段丘南辺に沿って、中村川を隔てた南側の水

田部を見下ろすような位置に築かれている（第3図）。発掘調査が実施されたのは1号墳・3号墳・5号墳～8号墳の6基で、そのうち調査前から古墳と認められていたのは1号墳と3号墳のみである（第4図）。他の4基は表土を剝いだ段階において検出された。なお、3号墳に隣接して南側と北側に古墳状の高まりがみられたため、ここも古墳と想定して調査を進めたが、主体部が検出されなかったことにより、自然地形と判断した（第4図）。

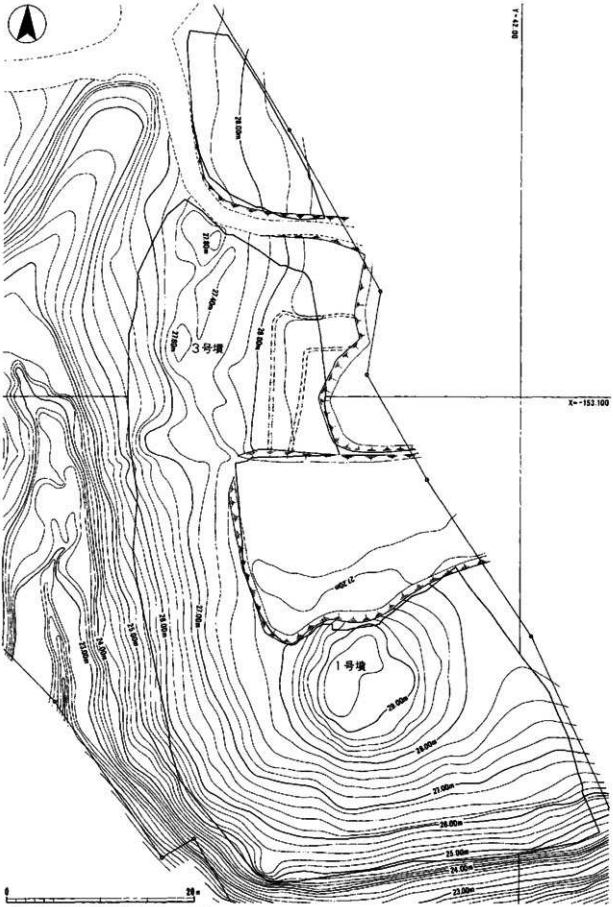
1号墳は径約15mの円墳である。主体部の横穴式石室の規模は伊勢湾西岸では最大級であり、石室内からは鉄地金銅張製の杏葉・翼珠・胡禄飾金具、銀製の鈕子などのきらびやかな遺物が出土した。4号墳も横穴式石室をもつ円墳で、その墳丘規模は1号墳よりもひとまわり大きい。詳細は不明であるが1号墳と並んで中村川流域の代表的な後期古墳の一つといえる。2号墳も詳細は不明であるが、一辺約18m、高さ約3mの明瞭な墳丘をもつ方墳で、天保古

名称	外形	墳丘規模	主体部	主体部内出土遺物		備考
				土器	土器以外	
1号墳	円墳	径約15m、高さ約1.5m	横穴式石室	土師器壺1	轡口金具1、轡尻金具2？、鉄1？、刀子2、鉄鏃7、鐙1、鉄3？、杏葉3、翼珠1、辻金具1、帽具、筒金具、胡禄飾金具、銀鈕金具、帽金具、鈴飾10、銅鏡1、耳環2、鈕子1、山形玉3、空玉3、翼玉1、ガラス玉62	墓道、周溝あり。周溝から土師器壺1・須恵器杯付壺1出土。石室埋土からは後世の土器も出土。
2号墳	方墳	一辺約18m、高さ約3m	不明	不明		未発掘。
3号墳	円墳	径約9m	小石室	須恵器杯身1・平瓶1	耳環2	周溝あり。
4号墳	円墳	径約22m、高さ約3.5m	横穴式石室	不明		未発掘。
5号墳	—	—	小石室		耳環1	
6号墳	—	—	横穴式石室	土師器椀1 須恵器杯蓋1・杯身2		
7号墳	円墳	径約7.5m	横穴式石室		管玉1	周溝あり。
8号墳	方墳？	—	木棺直葬？	須恵器平瓶1		表土から耳環1出土。
9号墳	円墳？	墳丘不明瞭	不明	不明		未発掘。

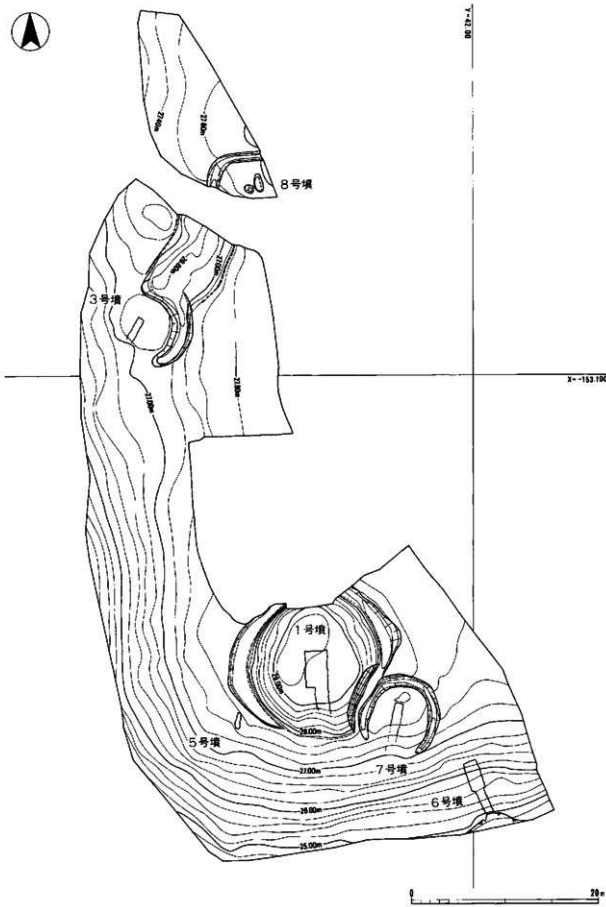
第2表　天保古墳群一覧



第3図　調査区位置図（1：2,000）



第4図　調査前地形測量図（1：400）



第5図　調査古墳測量図（1：400）

墳群の中では特異な存在である。

3号墳・5号墳～9号墳は小規模な古墳である。主体部は3号墳・5号墳が小石室、6号墳・7号墳が横穴式石室である。8号墳は木棺直葬と思われる。9号墳は未調査のうえに墳丘が不明瞭なため詳細は全く不明である。

4. 古 墳 各 説

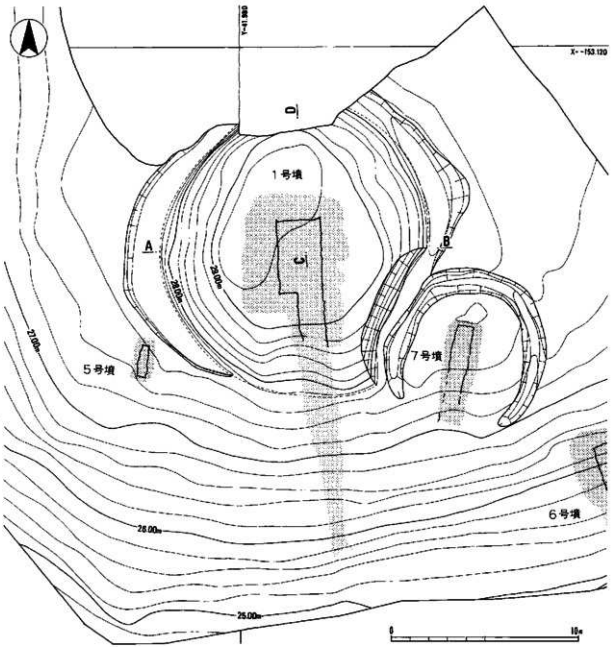
1. 1号墳

A. 位 置

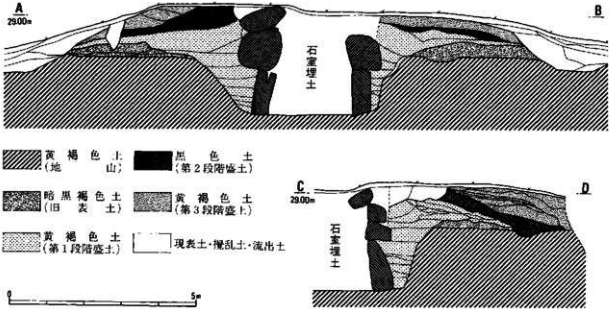
調査区南側、段丘崖近くに立地する。墳丘の南西裾近くに5号墳の石室があり、南東側では7号墳と接している。

B. 周 溝

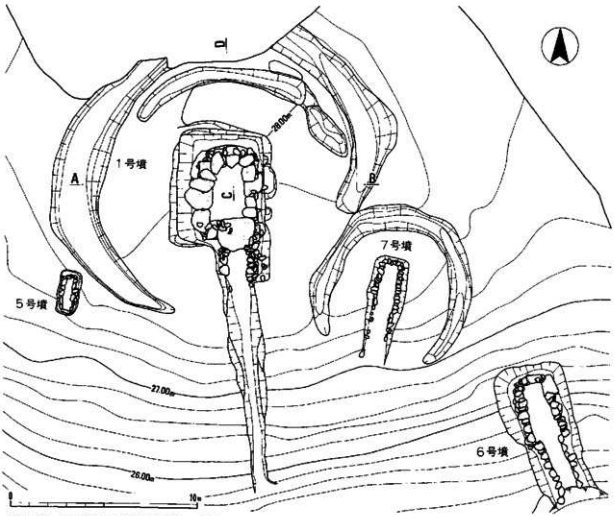
横穴式石室の開口部である南側の一部を除いて墳丘のまわりをほぼ全周していたと思われるが、北側は土取りにより消滅し、南西側は7号墳の築造時に



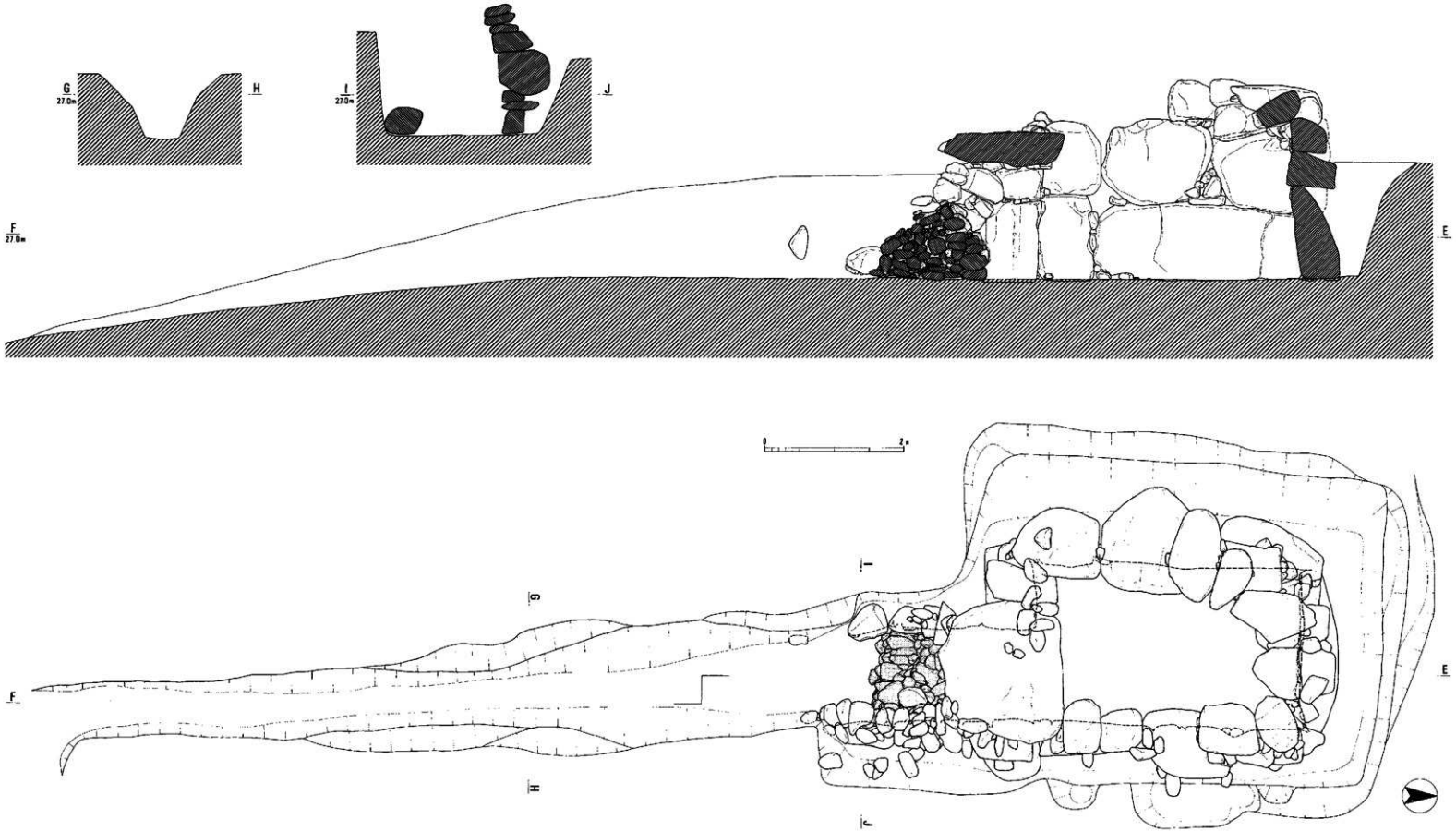
第6図 1号墳・5号墳・7号墳 外形測量図（1：200）



第7図　1号墳墳丘断面図（1：100）



第8図　1号墳基底面測量図（1：200）



第9図　1号墳石室実測図（1）（1：50）

削平されて消滅したと思われる。検出面からの周溝の深さは20～40cmほどで、南側ほど浅くなっている。

C．墳　丘

発掘調査前から明確な墳丘が認められ、墳頂部には石室の石材が露出していた。墳形は円墳である。

周溝内側の下端（墳丘裾）で測った墳丘の径は約15mで、墳丘基底線は標高27.8mの等高線にほぼ沿って正円に近い形でめぐっている。基底線から測った墳丘の高さは平均約1.5mで、本来はもっと高かったと思われる。

墳丘断面を観察すると盛土の過程は三つの段階に分かれるようである（第7図）。第1段階では暗黒褐色の旧表土の上に、掘形を掘った時の黄褐色土を主体とした土が盛られている。この黄褐色土には旧表土と同じ暗黒褐色土が縞状に混入している。第2段階では黒ボク質の黒色土を盛り、その上に第3段階の黄褐色土を主体とした層がみられる。この第3段階の土は第1段階の土と類似している。

墳丘盛土を全て除去した段階で、北側の周溝の内側で幅約1m、深さ10～20cmの平面形が弧状を描く溝が検出された（第8図）。墳丘のC－D断面（第7図）をみると、この溝はちょうど第1段階の盛土の裾部に位置し、第2段階の盛土が溝を埋めてかぶさっている。この溝は墳丘を築くうえで何らかの役割を果たしていたものと考えられる。

D．主体部

主体部は主軸をN3°Eにとり、南に開口する右片袖の横穴式石室[6]である。石室の天井石は羨道部の一枚しか残っておらず、石室内は黒色土が詰まっていたが、羨道部の西側壁を除いて、壁面の残存状態は比較的良好であった。残りの良い東側壁で測った石室の全長は約6.8mである。

石室には非常に大きな石材が使用されており、重量が4.4tに及ぶものもある（第13図）。石材として用いられていた石の種類は花崗岩と砂岩の2種類に大別できる。砂岩は一志地区で多くみられる井関石といわれるもので、風化を受けて非常にもろくなっていた。

① 石室掘形

石室掘形は旧表土から掘り込まれており、羨道部の西壁を除いた他の部分は明瞭に検出できた（第9図）。西壁が傾斜をもっているのに対して、東壁はほぼ垂直に掘られている。地山面から測った深さは1～1.5mである。掘形の平面形は石室と同じく右片袖で、玄室部分の規模は長さ約6.3m×幅約5.2m、羨道部分は長さ約2.0m×幅約2.8mである。

羨道掘形の南側には排水溝を兼ねたと思われる墓道が続いている。この墓道は幅0.8～1.6m、G－H断面（第9図）で検出面からの深さ約0.9mのもので、段丘崖のある南に向かって約11mの長さでのびている。

② 玄　室

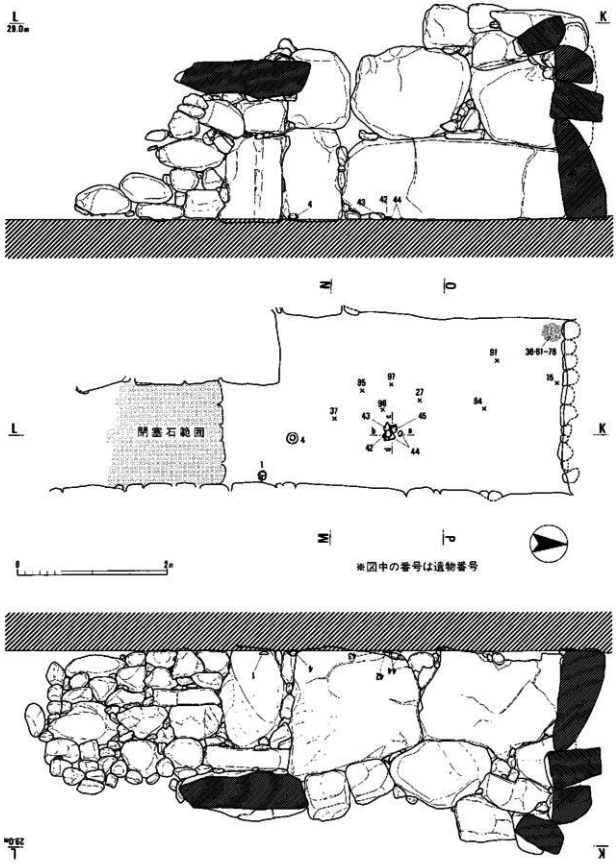
玄室の平面形は幅約2.3m×長さ約3.8mの長方形である。現在高は玄門部近くおよび奥壁と接する部分では約2.2mであるが、O－P断面（第11図）では約2.8mで、玄室中央部付近が最も高くなっていたようである。側壁および奥壁はやや内傾して構築されており、天井部近くの石材の積み方には持ち送りがみられる。

玄室の基底石には、両側壁がそれぞれ2枚ずつと奥壁が1枚の計5枚の石材が使用されている。これらの石材は板状のもので、1個体の平均の横幅が2m、高さが1.4mもあるのに対して、厚さはいずれも50cm程度と薄い。なお、基底石の平均の高さと玄室掘形の深さとはほぼ同じである。

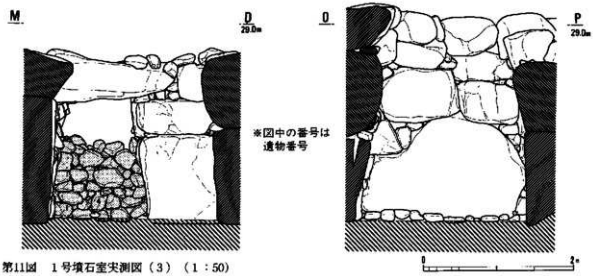
基底石の中で、まずはじめに設置されたのは奥壁基底石と思われる。この基底石は両側壁の基底石に挟まれたかたちで立っており、その下には縦横の幅が20cm前後、厚みが10cm程度のやや扁平な石材が一列に並んでいる（第9図・第10図）。これらの扁平な石材は奥壁基底石を安定させるために石室の内側から詰め込んだものと考えられる。玄室側壁の基底石の下には、このような詰め石はみられない。

2段目の石材は、基底石と掘形との間に掘形排土を詰めてから基底石の上にのせられたものと思われる。玄室掘形の東側壁部にある3か所の窪み（第9図）はこの作業の過程で地山を削る必要が生じたために作られたのであろう。2段目の石材の形態は基底石とは大きく異なり大きな石塊ともいうべきもので、不安定な基底石を上からしっかりと押さえつけて安定させる役目をはたしている。

3段目・4段目の石材は奥壁とその近くに残って



第10図　1号墳石室実測図（2）（1：50）



第11図　1号墳石室実測図（3）（1：50）

いるのみである。石材の大きさは2段目の石材よりひとまわり小さなものが使用されている。石の積み方は持ち送りをしており、玄室のコーナーの平面形は次第に丸みをもつ。

③　玄　門

袖石には、高さ約1.2m×幅約1.2m×厚さ約0.8m、重さ約2.4tの立方体に近い形態をした非常に安定感のある石材が用いられている。袖石に対応して東側壁にも高さ約1.3m×幅約0.6m×奥行き約0.9mの玄門立柱石が立てられており、玄門を強く意識している。

④　羨　道

羨道の平面形は幅約1.3m、残りの良い東側壁で測った長さ約3.0mのやや細長い長方形である。羨道の高さは、天井石が残っている玄門近くでは約1.6mであるが、I－J断面（第9図）の東側壁では1.8mある。

羨道側壁の石材の大きさは玄室の石材とは明らかに異なっており、人頭大のものと幅70～80cm×厚さ20～40cmのものが取り混ぜて積み重ねられている。

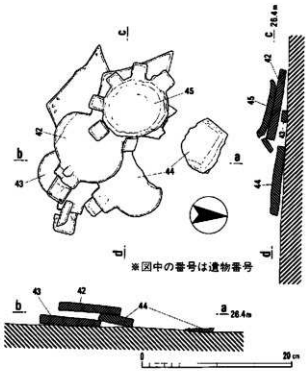
羨道部には人頭大の河原石を積んだ閉塞施設が残っていた。本来は天井石に達するまで積まれていたのであろうが、調査時には上部が崩壊していた。石の積み方をみると、袖石の南辺と東側壁の玄門立柱石の南辺とを結んだ線を意識したかのように5個の河原石を一列に並べてから、それより人口側へ石を敷んでいったものであることが分かる。

D．出土遺物[2]

石室内はすでに盗掘をうけていたようで、出土した遺物は少ない。実測図に掲載した遺物点数は多いが、ほとんどが破片や小物で、同一個体のものや、同一個体に付属していたと考えられるものも多く含まれている。なお、出土遺物としたものの中には明らかに別の時代の混入物や、古墳時代のものでも1号墳に伴うものと断定できないものもある。

①　土　器（1～11）（第14図、第3表）

須恵器蓋（1）　東側壁の玄門立柱石のすぐそばの床面直上で、天井部を下にした状態で出土した。



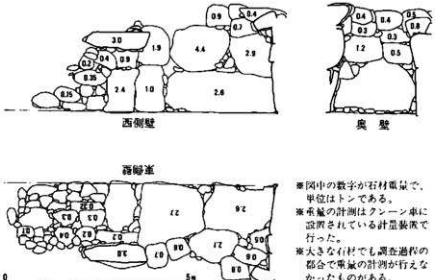
第12図　杏葉・雲珠出土状況実測図（1：5）

高杯(2)　石室埋土から出土した短脚の無蓋高杯で、ほぼ完形である。

須恵器台付壺(3)　南西側の周溝埋土から破片となって点々と出土した。すぐそばに5号墳の石室があるため1号墳に伴う土器であるとは断定できない。

須恵器短頸壺(4)　玄門の床面直上で口縁部を上にして出土した。完形品で、原位置を保っていたと思われる。

土師器椀(5)　北東側の周溝埋土から出土した。



第13図　1号墳石室の石材重量

土師器壺(6)　石室埋土から破片となって出土した。体部の上半と下半が接合できないため体部の形態は不確定である。

土師器皿(7)　石室埋土出土であるが、後世の混入であろう。鎌倉時代後半のものと思われる。

土師器杯(8)　平安時代中頃のもので、墳丘の表土中から出土した小片である。

山茶椀(9)　墳丘表土から出土した破片である。鎌倉時代の中頃のものであろう。

陶器鉢(10)　墳丘表土から出土した破片である。常滑産の鉢で、室町時代末葉のものであろう。

灰釉陶器長頸瓶(11)　石室埋土から出土した環状の把手をもつ高台付きの長頸瓶である。平安時代初頭頃のもので、石室が再利用された時に持ち込まれたと思われる。

② **刀装具**　(15～20)　(第15図、第5表)

鞘口金具(15)　奥壁近くの床面から出土した。長さ3.5cmの鉄地銀張製のもので、差し口部分に責金具が錆着し、内面に鞘木の木質が付着している。横断面は卵形で、短径2.7cm×復元長径 4.5cm程度、肉厚0.1cm前後である。

鞘尻金具(16)　石室埋土出土である。長さ4.6cmの鉄地銀張製のもので、差し口部分に責金具が錆着し、内面に鞘木の木質が付着している。横断面は卵形で、短径2.0cm×長径3.2cm、肉厚0.2cm前後である。

大刀責金具(17～19)　いずれも石室埋土から出土した銀製の責金具で、同一個体の破片であろうと思われる。幅0.6cm、厚み0.2cm前後のもので、外面には両縁に沿ってそれぞれ1本ずつ細い線が彫られており、その2本の線の内側には文様が彫られているようにみえるが不明瞭である。

鞘飾金具(20)　石室埋土出土である。幅1.7cmの小片で鉄地銀張製である。内面には鞘木の木質が付着し、差し口と思われる縁には錆着していた責金具が剥離した痕跡が認められる。

③ **武　器**　(21～27)　(第15図、第5表)

小鉄片と化した残片がほとんどで、図化できたものは実測図に示したもののみである。これらは全て鉄製である。なお、石室埋土出土の小鉄片の中には、大刀の残片と思われるものがいくつかある。

槍(21)　石室埋土出土である。ここでは槍先としておくが、鉾先あるいは石突とも考えられる。残存長は5.6cmで断面形は菱形である。

刀子(22・23)　22は閉塞石の石材の隙間から出土したもので、残存長が 6.9cm、刀身部長は 3.4cmである。刀身部は使用により痩せ細ったらしく、かなり短い。23は石室埋土出土の刀身部片で、残存長8.5cm、刀身部幅1.3cmの鉄製のものである。

鉄鏃(24～30)　27が玄室のほぼ中央の床面で、他は全て石室埋土から出土した。24～26は鏃身関部に浅い逆刺がある。24は鏃身部がほぼ完全に残っているが、25は両側の逆刺の両先が欠損しており、26は残りがかなり悪い。27～29は長三角形の鏃身部をもつ鉄鏃である。27は鏃身部の鋒が欠損しているが、長

さ7.2cmの茎部が完全に残っている。30は長頸鏃の頸部片で、片側に短い逆刺が付いている。

④　工具（12～14・31・32）（第14・15図、第５表）

砥石(12～14)　12は墳丘西斜面表土、13・14は墳丘の南東斜面表土出土である。古墳と直接関係するものではないと思われる。

鑿(31)　石室埋土出土の鉄製の鑿である。刀身部は断面が片丸で長さ2.0cm、幅1.1～1.3cm、茎部は断面が長方形で長さ17.5cm、茎部のほぼ中央部分で測った幅と厚さが0.9×0.6cmである。全長は19.5cmである。

錐(32)　石室埋土出土の鉄製の残片である。全体の1/3ほどがラセン状にねじれており、全体に木質が薄く付着している。ラセン状にねじれていない部分の断面は一辺が0.9cmの正方形で、残存長は5.0cmである。錐としたが断定はできない。

⑤　釘（33～35）（第15図・第５表）

いずれも石室埋土のもので、木棺に使用されたと思われる。33は鑿のような工具の柄とも考えられる。

⑥　馬　具（37～51）（第15～17図・第５表）

鈴具(37～41)　37は玄室床面から、他は石室埋土出土である。鉄製のもので、輪金の残片である。37～40は環部片、41は基部片と思われる。いずれも断面は円形で、径は0.5cm前後である。

杏葉(42～44)　玄室の床面直上で雲珠とともに重なり合って出土した（第10・12図）。いずれも剣菱形杏葉で、楕円部には方形の立聞が付く。これらは薄い鉄製の地板と縁金を重ねた上から金銅板で覆い、さらにもう一枚裏側に厚さ0.3cm程の鉄製の台板を重ねて鋲留めして作られた重ね造りのもので、鋲頭に銀を張った鉄地銀張製の円頭鋲を使用している。42は、立聞部分を含めた全長22cm、楕円部幅9.5cm、菱部幅11.1cm、鋲数66個のもので、立聞に吊手式の鈎金具が錆着している。この鈎金具も杏葉と同じく鉄地銀張製の円頭鋲で留められた鉄地金銅張製のものであるが、杏葉の立聞孔と擦れ合う部分には金銅板が張られていない。43は42と全く同じ大きさをもつ。鋲数は69個で、菱部の先端部分がわずかに欠損しているが、３枚の杏葉の中では最も残存程度が良い。立聞部分にはほぼ完全な形の鈎金具が錆着しており、その鈎金具に鉄地銀張製の責金具も付いている。44も42・43と同じ形態と大きさをもったものであるが、菱部が大きく欠損している。

雲珠(45)　杏葉とともに出土した鉄地金銅張製のものである。鉢部は径8.3cm、高さ1.3cm、断面が扁円形で、その周縁に方形の脚が付く。残存しているのは６脚であるが、鉢部の縁に残る剥離痕から、８脚であったことが分かる。各脚に付いている鉄地銀張製の円頭鋲の大きさや数から、鉢部を挟んで向かい合っている脚どうしが対応していることが分かる。また、脚の幅も明らかに他より細いものもみられる。各脚には、留められていた革紐の幅や要求される強度に差があったのであろう。

辻金具(46)　石室埋土出土の残片である。鉄地金銅張製のもので、鉢部の径は５cm程と推定される。脚の数は全く不明である。

鈎金具(47)　石室埋土出土の残片で、鉄製である。おそらく42か43の杏葉に錆着している鈎金具の一部であろう。

雲珠責金具(48～51)　いずれも石室埋土出土である。鉄地銀張製のもので刻み目をもっている。４個体しか出土していないが、本来、雲珠の８つの脚に１条ずつはめられていたのであろう。

⑦　武　具（36・52～78）（第15～19図、第５表）

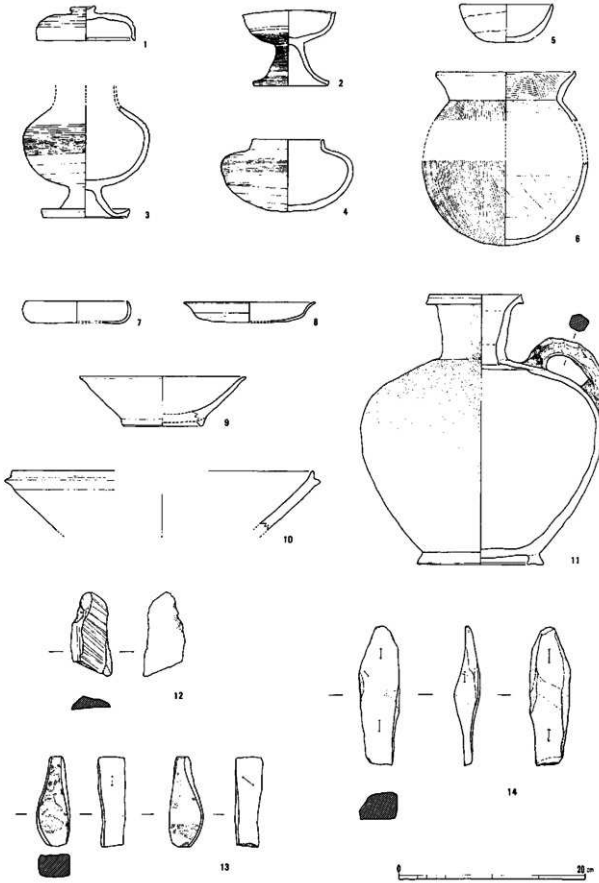
胡禄金具(52～60)　いずれも石室埋土から出土した飾金具で、鉄地金銅張製である。外表面にある円頭鋲の鋲頭も同じく鉄地金銅張で仕上げてある。52～56には文様が彫られており、52～55・57・59・60の裏面には布質が付着している。

靫金具(36・61～78)　全て玄室の北西隅の床面からまとまって出土した。61～77は鉄製の板に鉄地銀張製の円頭鋲が付く飾金具で、64・68の裏面には布質が認められる。36・78は鉄製のもので、61～77と同じ位置で出土したことから靫の金具としたが、断定はできない。

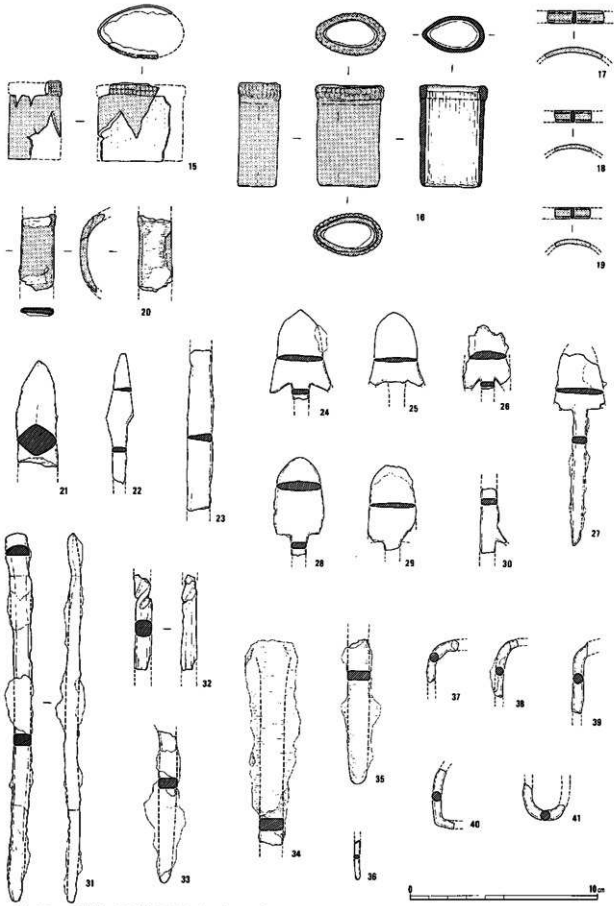
⑧　装身具（91～149）（第19図、第４・５表）

耳環(91・92)　91は玄室床面から、92は石室埋土から出土した。いずれも銀製で、やや楕円気味に仕上げられている。断面は91が円形で径0.4cm、92は楕円形で0.45×0.35cmである。

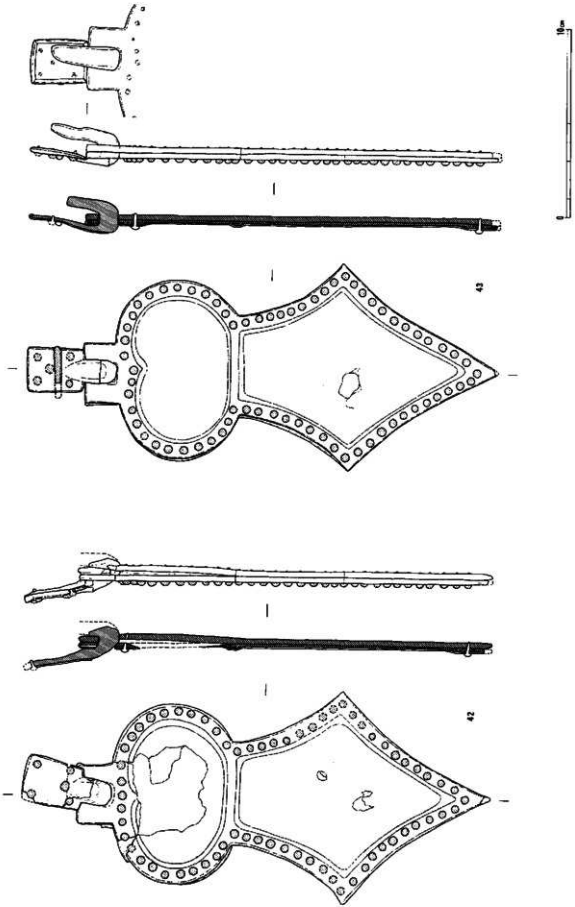
釵子(93)　石室埋土出土である。銀製の、棒状のもので、一方の端が楕円形のリング状に折り返してあ



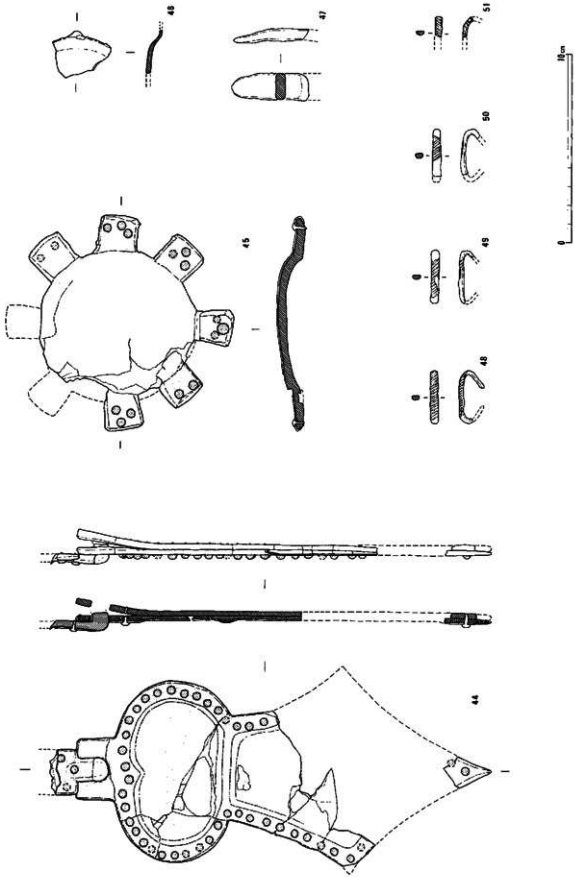
第14図　1号墳出土遺物実測図（1）（1：4）



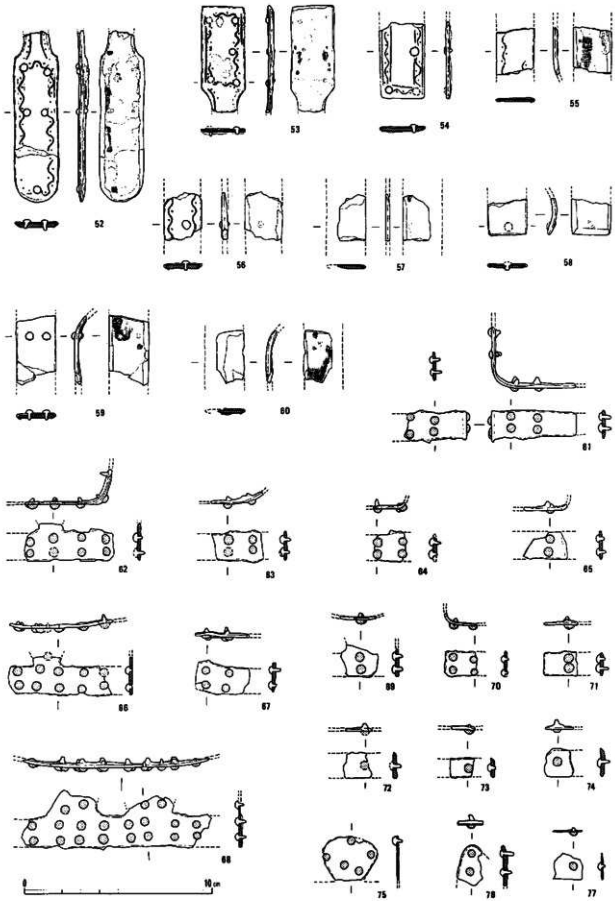
第15図　1号墳出土遺物実測図（2）（1：2）



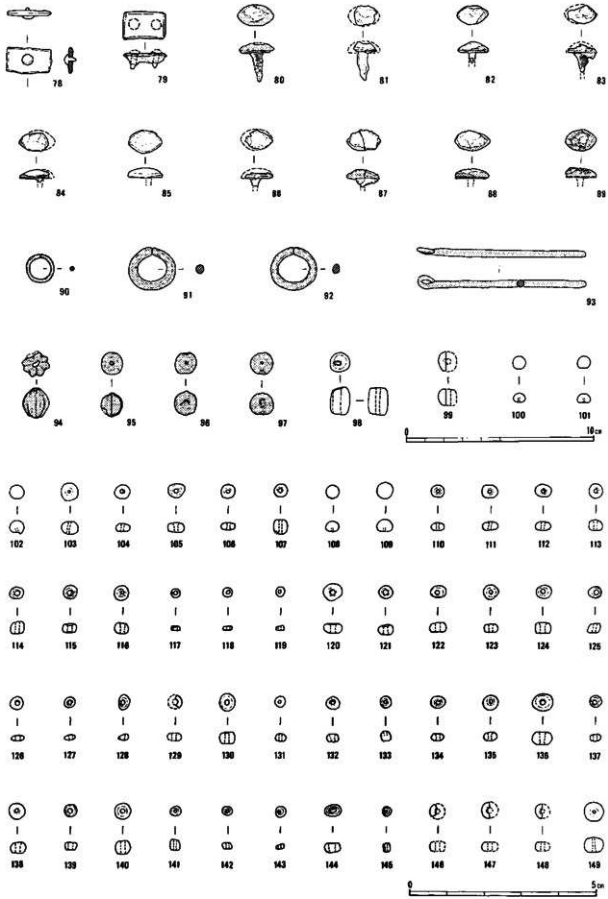
第16図　1号墳出土遺物実測図（3）（1：2）



第17図　1号墳出土遺物実測図（4）（1：2）



第18図　1号墳出土遺物実測図（5）（1：2）



第19図　1号墳出土遺物実測図（6）（78～101＝1：2，102～149＝1：1）

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	整理番号
1	玄門	須恵器 坩堝	口径：10.4 器高：3.6	内外面ロクロナデ。天井部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ左回転。中央が回むツマミをもつ。	暗青灰色 砂粒多く含む	口縁：3/4	外面に自然釉付着。	10-0001
2	石室埋土	須恵器 坩堝 高杯	口径：9.6 器径：7.8 器高：7.7	外面は杯底部から脚部にかけてカキ目。内面ロクロナデ。	灰色 砂粒含む	口縁：完存 裾部：3/5	杯部内外面と脚部外面に自然釉付着。	10-0003
3	周溝埋土	須恵器 台付壺	体径：13.5 台径：8.8?	体部内面と台部内外面ロクロナデ。体部外面上半膨らみ中日と3条の沈線、下半ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	淡灰色 砂粒含む	体部：2/3 台部：2/3	内外面に自然釉付着。	10-0022
4	玄門	須恵器 坩堝	口径：10.4 器高：3.6	内面全体と口縁部・肩部の外面ロクロナデ。体部外面中位カキ目、下位ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	暗青灰色 砂粒少し含む	完存		10-0002
5	周溝埋土	土師器 椀	口径：9.8 器高：4.1	内面強力内ナデ。外面の調整不明。外面に粘土顔のツナギ痕残る。	にぶい橙色 細砂粒含む	口縁：2/3	口縁部に黒斑が1か所みられる。	10-0070
6	石室埋土	土師器 甕	口径：14.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケのちナデ。体部外面縦方向ハケ、内面ヘラケズリ。底部外面ハケ、内面ナデ。	にぶい黄橙色 砂粒含む	口縁：5/6	体部の上部と下半とに接合できない。	10-0095
7	石室埋土	土師器 皿	口径：10.8? 器高：2.3?	外面指オサエのち軽いナデ、内面ナデ。	黄橙色 砂粒含む	口縁：1/3		10-0086
8	墳丘表土	土師器 杯	口径：14程度 器高：2.2	口縁部内外面と底部内面ヨコナデ。底部外面指オサエ。	浅黄橙色 微砂粒少し含む	口縁：1/9	器壁薄く、よく焼け固まる。	10-0089
9	墳丘表土	陶器 山茶碗	口径：17.6 器高：5.3 台径：8.1	内外面ロクロナデ。高台は貼り付け。	灰色 砂粒含む	口縁：1/5 高台：1/5		10-0088
10	墳丘表土	陶器 鉢	口径：32程度	内面からロ縁端部外面にかけてヨコナデ。外面は指オサエのちナデ?	暗赤褐色 細砂粒含む	口縁：1/7		10-0090
11	石室埋土	瓦質陶器 鍋	口径：9.7 器高：28.6 体径：25.7 台径：13.2	口頸部内外面から体部上半に灰釉が厚くかかる。体部内面は丁寧調整。体部外面下半から底部外面ロクロヘラケズリ。台部はロクロナデ。	胎土：明赤褐色 灰釉：暗黄緑色 砂粒含む	口縁：3/5 体部：3/4 台部：完存		10-0021

第3表　1号墳出土土器一覧

遺物番号	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	色調	備考	整理番号
99	8.5	10.0?	3.0?	—	褐青色	1/3 残存	10-0119
100	4.9	6.9	1.0	0.33	褐青色	孔=貫通せず	10-0023
101	4.9	6.8	0.8	0.32	褐青色	孔=貫通せず	10-0031
102	3.2	3.8	0.6	0.07	褐青色	孔=貫通せず	10-0024
103	3.6	5.0	0.6	0.13	褐青色		10-0025
104	2.0	3.9	1.0	0.05	褐青色		10-0026
105	2.2	4.2	1.0	0.04	褐青色		10-0027
106	2.0	3.8	1.0	0.04	褐青色		10-0029
107	3.8	3.6	1.1	0.05	褐青色		10-0030
108	2.9	3.7	0.9	0.05	褐青色	孔=貫通せず	10-0032
109	3.4	4.1	1.0	0.08	褐青色	孔=貫通せず	10-0033
110	2.0	3.3	1.0	0.02	褐青色		10-0034
111	2.3	3.8	1.0	0.03	褐青色		10-0035
112	2.2	3.8	1.0	0.04	褐青色		10 0036
113	2.6	3.8	1.0	0.05	褐青色		10-0037
114	3.1	3.6	1.1	0.05	褐青色		10-0038
115	2.1	3.8	1.5	0.03	褐青色		10-0039
116	2.6	3.6	1.0	0.06	褐青色	一方の孔方形	10-0040
117	1.1	2.3	1.1	0.01	褐青色		10-0041
118	1.1	2.4	0.9	0.01	褐青色		10-0042
119	1.2	2.4	0.8	0.01	褐青色	色一やや白み	10-0043
120	2.8	4.8	2.1	0.08	淡青色		10-0044
121	2.8	3.9	1.4	0.05	淡青色		10-0045
122	2.6	3.9	1.3	0.05	淡青色		10-0046
123	2.3	4.0	1.0	0.05	褐青色		10 0047
124	2.8	3.9	1.2	0.06	淡青色		10-0048
125	2.4	3.7	1.3	0.05	褐青色	色=やや緑み	10-0049
126	1.3	3.5	1.3	0.01	淡青色		10-0050
127	1.4	2.9	1.2	0.01	淡青色		10-0051
128	1.8	3.4	1.3	0.01	淡青色		10-0052
129	2.0	3.8?	1.5?	—	淡青色	1/3 残存	10-0053
130	2.9	4.3	1.2	0.08	黄緑色		10-0054
131	2.0	3.0	0.9	0.01	黄緑色		10-0055
132	2.3	3.5	1.4	0.02	黄緑色		10-0056
133	2.5	3.3	1.0	0.03	黄緑色	一方の孔平円	10-0057
134	2.0	3.8	1.3	0.02	黄緑色	気泡あり	10-0058
135	2.5	4.0	1.2	0.04	黄緑色	一方の孔平円	10-0059
136	3.4	5.3	1.5	0.13	黄色	黄褐団み多い	10-0060
137	2.0	3.4	1.1	0.01	黄色		10-0061
138	2.8	4.5	1.2	0.08	黄色		10-0062
139	1.8	3.4	1.3	0.02	黄色		10-0063
140	3.3	4.2	1.2	0.07	黄色	黄褐団みあり	10-0064
141	2.9	3.0	0.9	0.02	黄色		10-0065
142	1.6	2.7	0.9	0.01	褐青色		10-0066
143	1.7	3.0	1.0	0.01	淡青色		10-0067
144	2.4	4.0	1.8	0.05	淡青色	気泡あり	10-0068
145	2.1	2.3	0.6	0.01	褐青色	側面凹む	10-0069
146	2.6	4.0?	1.0?	—	淡青色	1/3 残存	10-0120
147	2.5	4.4?	1.4?		淡青色	1/2 残存	10-0121
148	2.4	4.0?	1.0?	—	淡青色	1/2 残存	10-0122
149	4.1	5.6	0.8	(0.18)	褐青色	孔内に金属線	10-0028
	—	—	—	—	褐青色	破片実測不可	10-0123

第4表　1号墳出土ガラス小玉一覧

遺物番号	出土位置	名称	備考	整理番号
12	墳丘裾部	鏃 石	現存長 8.9cm。 砂岩製	10-0093
13	〃	〃	現存長 9.5cm。 〃	10-0092
14	〃	〃	現存長14.6cm。 〃	10-0091
15	玄室床面	朝 ﾊ 金 具	黄金具が細薄。 鉄地銅張製	10-0155
16	石室埋土	鞍 貝 金 具	黄金具が細薄。 〃	10-0126
17 ~ 19	〃	大刀黄金具	同一個体？ 銅製	10-0152
20	〃	鞍 鐙 金 具	黄金具の剥離痕あり。 鉄地銅張製	10-0154
21	〃	槍？・矛？	身部の先端部分。残存長幅 5.5cm。鉄製	10-0150
22	閉塞石	刀 子	残存長 6.9cm。刀身部長 3.6cm。 〃	10-0143
23	石室埋土	〃	刀身部片。残存長 8.5cm。 〃	10-0129
24	〃	鉄 鏃	鏃身部長 4.4cm、最大幅 3.3cm。 〃	10-0006
25	〃	〃	鏃身部長 3.5cm、最大幅 2.9cm。 〃	10-0007
26	〃	〃	鏃身部鏃西存長 3.4cm。 〃	10-0010
27	玄室床面	〃	残存長10.3cm、鏃身部最大幅2.7cm。 〃	10-0142
28	石室埋土	〃	鏃身部長 4.1cm、最大幅 2.7cm。 〃	10-0109
29	〃	〃	鏃身部長 4.0cm。 〃	10-0127
30	〃	〃	頸部、片逆刺あり。残存長 3.5cm。 〃	10-0128
31	〃	鉄 鑿	全長19.5cm。刀身部長 2.0cm。 〃	10-0131
32	〃	鉄 鑿？	残存長 5.0 cm。 〃	10-0147
33	〃	鉄 刮？	工具の刮か？ 残存長 8.1cm。 〃	10-0149
34	〃	鉄 刮	本質細薄。残存長10.9cm。 〃	10-0144
35	〃	〃	〃 残存長 7.6cm。 〃	10-0145
36	玄室床面	馬 金 具？	残存長 2.0cm。 〃	10-0151
37	〃	鉸 具	鉸金細薄片。 〃	10-0134
38	石室埋土	〃	〃 〃	10-0148
39	〃	〃	〃 〃	10-0135
40	〃	〃	〃 〃	10-0132
41	〃	〃	鉸金薄細片。 〃	10-0133
42	玄室床面	杏 葉	鉸金具細薄。鉄地金銅張製（銅製＝銀張）	10-0072
43	〃	〃	鉸金具・黄金具細薄。 〃	10-0074
44	〃	〃	鉸金具細薄。 〃	10-0073
45	〃	貫 玉	8翼。 〃	10-0141
46	石室埋土	辻 金 具	小片。 鉄地金銅張製	10-0163
47	〃	杏葉鉸金具	小片。 鉄製	10-0130
48	〃	雲珠黄金具	刻み目をもつ。 鉄地銅張製	10-0136
49	〃	〃	〃 〃	10-0138
50	〃	〃	〃 〃	10-0137
51	〃	〃	〃 〃	10-0139
52	〃	胡簶鋲金具	幅 2.3cm、残存長 9.0cm。鉄地金銅張製	10-0011
53	〃	〃	幅 2.3cm、残存長 5.6cm。 〃	10-0010
54	〃	〃	幅 2.4cm、残存長 4.0cm。 〃	10-0008
55	〃	〃	幅 2.0cm、残存長 2.5cm。 〃	10-0118
56	石室埋土	胡簶鋲金具	幅 2.0cm、残存長 2.5cm。鉄地金銅張製	10-0117
57	〃	〃	残存長 2.5cm。 〃	10-0153
58	〃	〃	残存長 1.9cm。 〃	〃
59	〃	〃	幅 2.1cm、残存長 3.7cm。 〃	〃
60	〃	〃	残存長 2.8cm。 〃	〃
61	玄室床面	鞍 鐙 金 具	幅1.2~1.5cm。 銅製（銅張＝銀張）	10-0158
62	〃	〃	幅 1.5cm。 〃	10-0159
63	〃	〃	幅 1.5cm。 〃	10-0161
64	〃	〃	幅 1.3~1.5cm。 〃	〃
65	〃	〃	幅 1.5cm。 〃	〃
66	〃	〃	幅 1.5cm。 〃	10-0160
67	〃	〃	幅 1.4cm。 〃	10-0161
68	〃	〃	幅 1.5~1.6cm。 〃	10-0157
69	〃	〃	幅 1.2cm。 〃	10-0161
70	〃	〃	幅 1.2cm。 〃	〃
71	〃	〃	幅 1.2cm。 〃	〃
72	〃	〃	幅 1.3cm。銅張残存せず。 〃	〃
73	〃	〃	幅 1.0cm。 〃	〃
74	〃	〃	幅 1.4cm。 〃	〃
75	〃	〃	残存最大幅 2.9cm。 〃	10-0156
76	〃	〃	残存長 2.1cm。 〃	10-0161
77	〃	〃	残存長 1.6cm。 〃	〃
78	〃	鞍鐙金具？	長 2.3cm、幅 1.2cm。 銅製	10-0164
79	石室埋土	鞍 金 具	長 2.3cm、幅 1.4cm。 鉄地金銅張製	10-0016
80	〃	鉸 具	銅張 1.9×1.1cm。 鉄地銅張製	10-0017
81	〃	〃	〃	10-0018
82	〃	〃	銅張 1.7×1.0cm、銅高 0.6cm。 〃	10-0019
83	〃	〃	〃	10-0020
84	〃	〃	銅高 0.5cm。 〃	10-0111
85	〃	〃	銅張 1.8×1.2cm、銅高 0.5cm。 〃	10-0112
86	〃	〃	〃	10-0113
87	〃	〃	銅張 1.8×1.1cm、銅高 0.5cm。 〃	10-0114
88	〃	〃	銅張 1.7×1.1cm、銅高 0.5cm。 〃	10-0115
89	〃	〃	銅張 1.6×1.1cm、銅高 0.5cm。 〃	10-0116
90	〃	鉸 具	径 1.5cm、重 3.1 g 銅製	10-0125
91	玄室床面	耳 環	径 2.4×2.2cm、重 6.4 g。 〃	10-0004
92	石室埋土	〃	径 2.4×2.2cm、重 6.1 g。 〃	10-0005
93	〃	鈴 子	全長 9.0cm？ 重 7.5 g。 〃	10-0009
94	玄室床面	川 形 玉	長 1.5cm、径 1.4cm、重 3.0 g。 〃	10-0112
95	〃	空 玉	長 1.2cm、径 1.1cm、重 0.9 g。 〃	10-0013
96	〃	〃	長 1.2cm、径 1.1cm、重 1.0 g。 〃	10-0014
97	〃	〃	長 1.1cm、径 1.2cm、重 1.2 g。 〃	10-0015
98	石室埋土	管 玉	長1.5cm、径1.0cm、重 0.97 g。 鉄切製	10-0071

第５表　１号墳出土遺物（土器とガラス小玉を除く）一覧

る。もう一方の端は欠損しているのかどうかよく分からない。断面は径0.3～0.4cmの円形である。

玉類(94～149)　山梔玉(94)・空玉(95～97)は薄く延ばした銀を半球状にし、それを2つ合わせて作られている。棗玉(98)は琥珀製である。ガラス小玉(99～149)は図化可能なものが51個、粉々になった破片が1～2個分出土している。色は紺青色・淡青色・黄色・黄緑色の4色である。

⑨　その他の飾金具（79～90）（第19図、第5表）

いずれも石室埋土出土である。79は鉄地金銅張製で、革帯に打ちつけられていたと思われる。80～89は鈴張に銀が張られている飾鈴である。93の銀環は耳環としては小さすぎることから、刀装具か帯飾金具として使用されていたものと思われる。

2．2号墳

1号墳の北西約30mに位置する。調査区外のため発掘調査はされていない。現況は竹林である。墳丘の西裾は小規模な土取りのため崩れているが、北裾と南裾は明瞭に認められる。墳形は截頭四角錐形をした方墳で、規模は一辺約18m、現高約3mである。墳頂部中央には盗掘坑と思われる径約3m、深さ約0.5mの窪みがある。出土遺物や主体部については全く知られていない。

3．3号墳

A．位　置

1号墳の北北西約30mに位置し、調査区西側にある小さな谷へ向かう斜面の肩に築かれている。

B．外　形

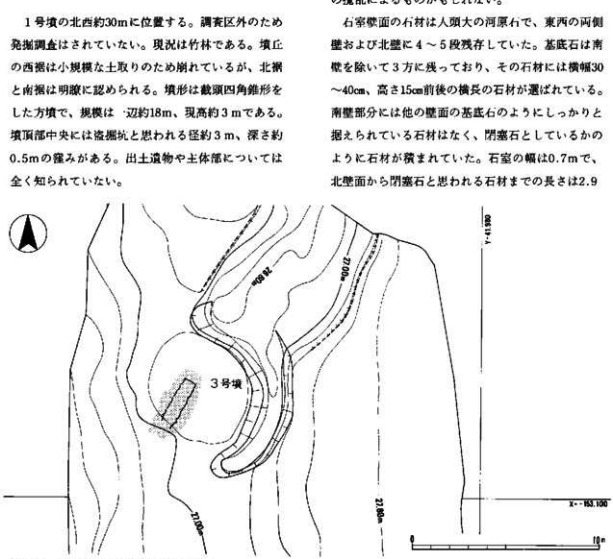
径9m程の円墳である。発掘調査前から墳丘状の高まりが認められたが、調査の結果、墳丘盛土と断定できる土層は確認できなかった。周溝は西側の半周ほどしかまわらない。

C．主体部

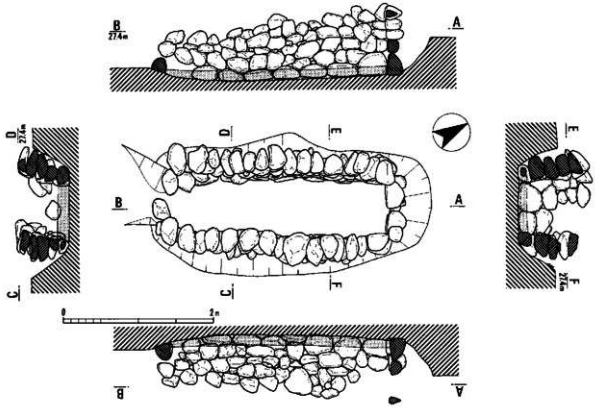
主体部は主軸をN28°Eにとる小石室である。

石室掘形の平面形は楕円形に近い隅丸の長方形で、長さ約3.8m×幅1.4～1.7mである。掘形の南壁は入口状にハの字形に開くように検出されたが、後世の攪乱によるものかもしれない。

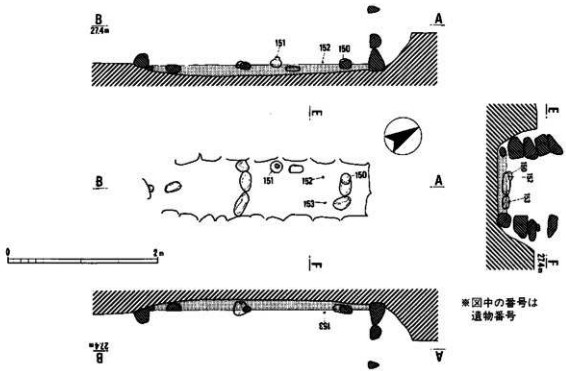
石室壁面の石材は人頭大の河原石で、東西の両側壁および北壁に4～5段残存していた。基底石は南壁を除いて3方に残っており、その石材には横幅30～40cm、高さ15cm前後の横長の石材が選ばれている。南壁部分には他の壁面の基底石のようにしっかりと据えられている石材はなく、閉塞石としているかのように石材が積まれていた。石室の幅は0.7mで、北壁面から閉塞石と思われる石材までの長さは2.9



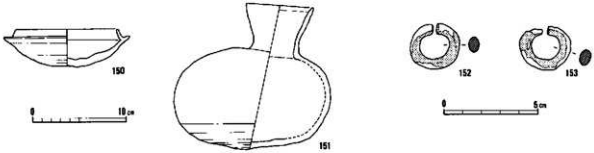
第20図　3号墳外形測量図（1：200）



第21図　3号墳石室実測図（1：50）



第22図　3号墳遺物出土状況実測図（1：50）



第23図　3号墳出土遺物実測図（150・151＝1：4，152・153＝1：2）

mとなる。石室内には基底石の上端近くまで土が貼ってあり、床面を作っている。また、床面には棺台と思われる石材が埋められていた。

D．出土遺物（第23図、第6・7表）

石室内から須恵器杯身(150)・平瓶(151)・耳環(152・153)が出土した。いずれもほぼ原位置を保っていたと思われる。特に2個の耳環の出土位置は被葬者の頭位を知るうえで重要である。

4．4号墳

1号墳の西南西約120mの段丘崖近くに位置する。現況は竹と桧の林である。墳形は円墳で、墳丘規模は径約22m、高さ約3.5mである。墳頂部は窪んでいて横穴式石室のものと思われる石材の一部が露出している。また、南側墳丘斜面の墳丘が崩れている部分にも石材が露出しており、この2か所をもとに石室の基本軸を想定すると、おおよそN20°Eとなる。山土遺物は知られていない。

5．5号墳

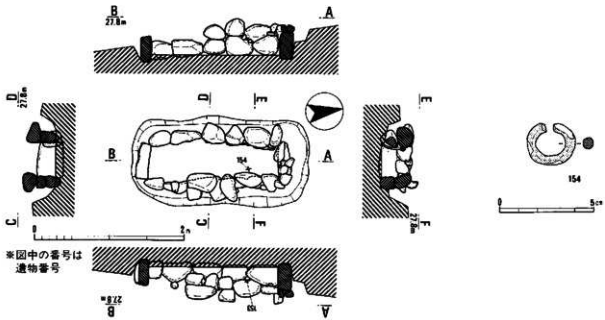
A．位　置

1号墳の南西側周溝の肩近くで石室が検出された。墳形や墳丘規模は不明である。

B．主体部

主体部は主軸をN9°Eにとる小石室である。

石室掘形の平面形は隅丸の長方形で、長さ2.35m、幅1.15mである。石室の規模は全長が約1.7m、幅は中央部で0.5mあるが、北壁近くでは0.35mしかない。大人が一人やっと寝ることができる程度の規模である。残存していた石室の石材は、北側半分が2段目までで、南側は基底石のみであった。基底石の石材には東西の両側壁には横幅0.3～0.4m、高さ0.2m程の横長の石材が5個ずつ使用されており、南壁には横幅約0.5m×高さ0.35m、北壁には横幅



第24図　5号墳石室実測図（1：50）

約0.5m×高さ0.2mの長方形の石材がそれぞれ1個ずつ据えられている。

C．出土遺物（第25図・第7表）

出土遺物は石室基底石の上端とほぼ同じ高さで検出された銅芯銀張製の耳環1点のみである。この高さが石室床面であったと思われる。

6．6号墳

A．位　置

1号墳の南東西約10mに位置し、中村川に向かって下る崖の斜面で石室が検出された。墳形や墳丘規模は不明である。

B．主体部

主体部は主軸をN　20°Wにとり、南南東に開口する両袖の横穴式石室である。

石室掘形は両袖気味になる長方形状のもので、検出長約7.7m、玄室部分幅約3.8m、羨道部分幅2.8mである。

石室の石材は玄室部分の残りがよく、玄室後半部分では5～6段目も残っている。羨道西側壁の南端にある石材は外護列石となるかのような位置にあるが崖面に面しているため羨道側壁の石材が崩れたものとも考えられる。

石室の規模は、羨道西側壁南端の石材を除いて計測すると、全長6.3m、玄室の長さ約3.2m、幅1.4～1.5m、羨道の長さ3.1m、幅約0.8mとなる。

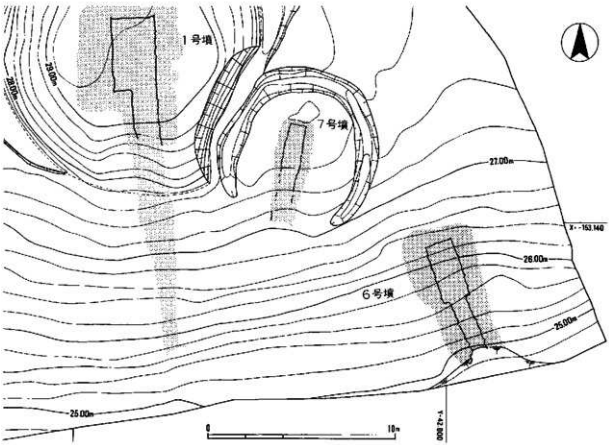
側壁の基底石は横幅0.5m前後、高さ0.4m前後のやや横長の石材を横置きして並べられている。左右の袖石は、側壁基底石よりひとまわり大きい石材を縦置きして玄門立柱石としている。奥壁基底石の数は2個で、袖石よりもさらにひとまわり大きい石材が使用されている。

C．出土遺物（第30図・第6表）

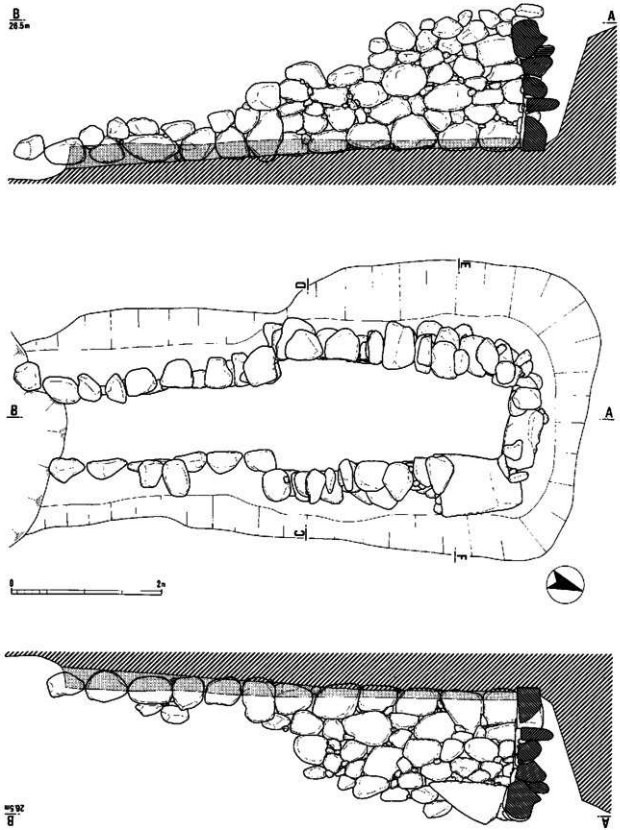
出土遺物は土器のみである。

土師器椀(155)　右袖近くの玄室床面から口縁部を上にして出土した。器壁が厚く、口縁部外面のヨコナデがはっきりと認められる。

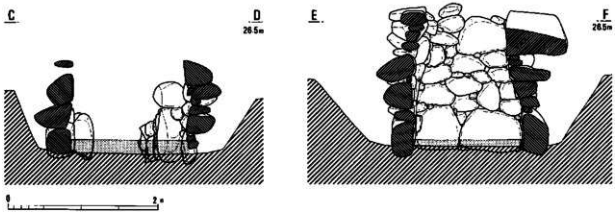
須恵器壷杯(156～159)　158を除いて、いずれも器壁が厚くがっしりとした感じの作りである。158は器壁が薄く、器高も低くなりそうであるが、口縁部



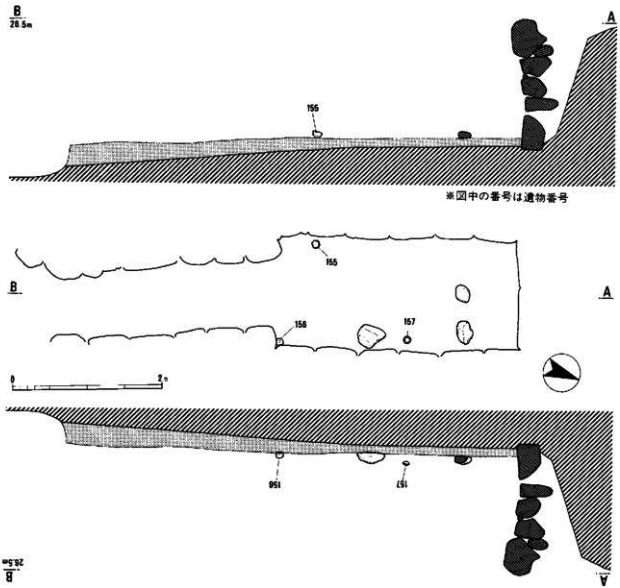
第26図　6号墳・7号墳外形測量図（1：200）



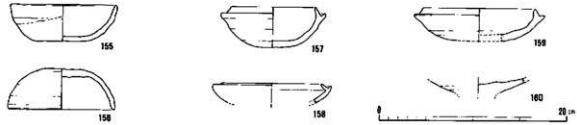
第27図　6号墳石室実測図(1)（1：50）



第28図　6号墳石室実測図(2)（1：50）



第29図　6号墳遺物出土状況実測図（1：50）



第30図　6号墳出土遺物実測図（1：4）

の作りや胎土・焼成・色調など、157に類似する。須恵器高杯(160)　杯底部片で、3方に透かしを入れた痕跡が残る。

7．7号墳

A．墳　丘

7号墳は、1号墳の墳丘の南東部を削って築かれている。周溝は石室の開口部付近を除いた3方にめぐって検出されたが、墳丘盛土はほとんど残っていなかった。墳形は円墳で、周溝内側の下端（墳丘裾）で測った径は約7mである。

B．主体部

主体部は主軸をN11°Eにとり、南南西に開口する無袖の横穴式石室である。

石室掘形は長方形状で、検出長約5.8m、幅約1.8mである。

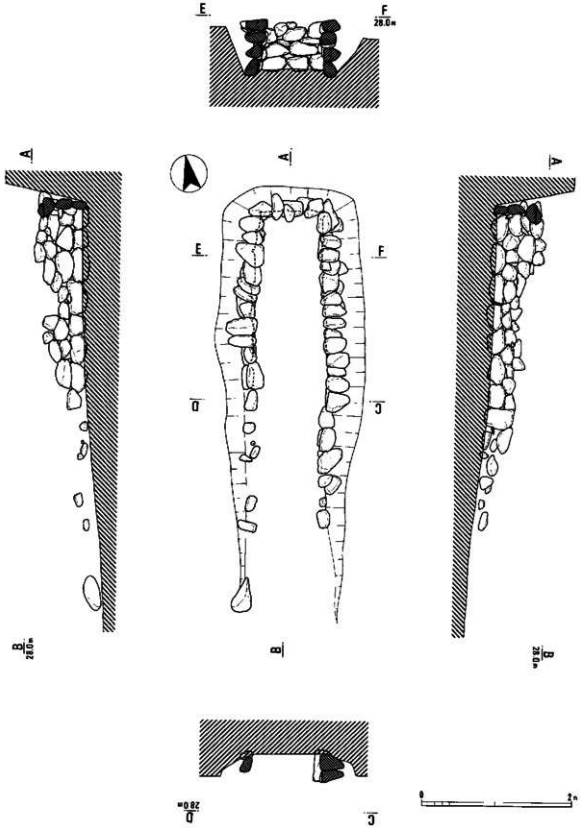
石室は人頭大の河原石を小口積みにして築かれており、奥壁近くでは3～4段目まで残っている。無袖の石室であるが、東側壁に残る玄門立柱石の存在から、玄室と羨道とを区分することができる。玄室の基底石には横幅約0.3～0.4m、高さ20cm前後の横長の石材が使用されている。基底石の大きさや据え方は側壁も奥壁も同じである。東側壁にある玄門立柱石は玄室の基底石とほぼ同じような大きさの石材が用いられており、縦置きに据えられている。西側壁に玄門立柱石があったかどうかは、想定される部分に基底石が残っていないため不明である。羨道には基底石とよべるようなしっかりと据えられた石材

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	整理番号
150	3号墳 裾台直上	須恵器 杯身	口径：10.8 器高：4.0	内外面ロクロナデ。底部外面中央ヘラ切り痕残り、その周囲の一部ロクロヘラケズリ。	明灰色 細砂粒少し含む	ほぼ完存	焼成あまく、表面剥離激し。	10-0077
151	3号墳 石室床面	須恵器 平瓶	口径：7.0 体径：16.7 底径：15.5	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ左回転。	灰白色 細砂粒少し含む	口縁：3/5 体部：完存	底部内面に大きな焼き膨れあり。	10-0078
155	6号墳 玄室床面	須恵器 椀	口径：11.3 器高：4.0	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面指オサエの痕はいナデ。底部外面に粘土塊のツナギ痕あり。	灰黄色 微砂粒含む	完存		10-0082
156	6号墳 玄室床面	須恵器 杯蓋	口径：11.2 器高：4.3	内外面ロクロナデ。天井部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ左回転。	灰白色 微砂粒含む	完存	器壁厚い。	10-0080
157	6号墳 玄室床面	須恵器 杯身	口径：9.2 器高：4.3	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ左回転。	灰色 微砂粒含む	ほぼ完存	器壁厚い。	10-0081
158	6号墳 表道埋土	須恵器 杯身	口径：10.4？	内外面ロクロナデ。	灰色 微砂粒含む	口縁：1/4		10-0105
159	6号墳 墳頂表土	須恵器 杯身	口径：12.0？	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。	灰色 微砂粒含む	口縁：1/7		10-0104
160	6号墳 墳丘埋土	須恵器 高杯	—	内外面ロクロナデ。透かし孔は3方。	灰色 細砂粒多く含む	杯底部片		10-0108
162	8号墳 墓域？埋土	須恵器 平瓶	—	内外面ロクロナデ。胴部外面平行叩き目のちナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。体部外面に粘土紐ツナギ痕残る。	暗灰色 微砂粒少し含む	体部片	内面は焼き膨れ多い。	10-0084

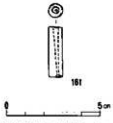
第6表　3号墳・6号墳・8号墳出土土器一覧

遺物番号	出土位置	名称	備考	整理番号
152	3号墳石室床面	耳環	径2.6×2.4cm、重8.9g。銅芯金張製	10-0076
153	3号墳石室床面	耳環	径2.7×7cm、重37.8g。銅芯金張製	10-0076
154	3号墳石室床面	耳環	径2.6×2.2cm、重8.4g。銅芯金張製	10-0079
161	7号墳周溝埋土	管玉	長32.7cm、径0.7cm。孔は両側から穿孔。径0.3cmと0.1cm。	10-0083
164	8号墳墳丘表土	耳環	径2.2×2.0cm、重8.3g。銅製	10-0085

第7表　3号墳・5号墳・7号墳・8号墳出土装身具一覧



第31図　7号墳石室実測図（1：50）



第32図　7号墳出土遺物実測図（1：2）

が認められなかった。

石室の規模は、羨道の南端部分が不明瞭であるが、西側壁の南端にある石を羨道の石材とすると、全長約5.3m、玄室の長さ約2.6m、幅約0.9m、羨道の長さ約2.7m、幅約0.8mとなる。

C．出土遺物（第32図・第7表）

石室内からは遺物が全く出土しなかったが、周溝から碧玉製の管玉(161)が出土した。

8．8号墳

A．位　置

3号墳の北西約15mに位置する。

B．外　形

墳丘は削平により失われており、周溝も一部が検出されたのみで、墳丘規模は不明である。周溝はくの字に曲がり、東側と南側にのびているが、東側は調査区外のため確認できず、南側は林道により既に削平されていた。墳形はおそらく方墳であろう。

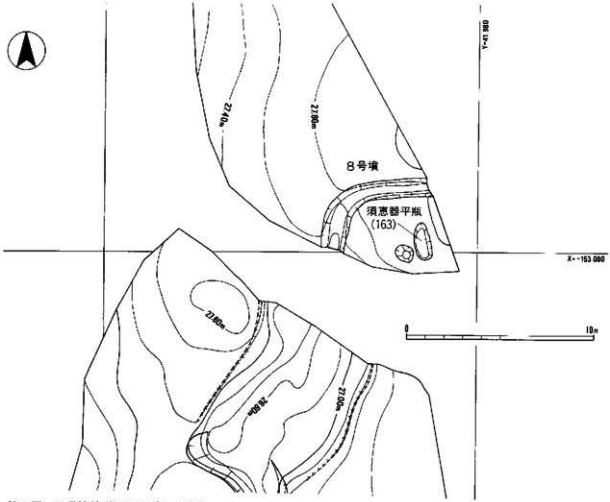
C．主体部

周溝で囲まれた部分で長径約1.9m、短径約0.9m、深さ約0.15mの楕円形の土坑が検出された。検出された位置、規模、須恵器平瓶の出土などから、この土坑を墓坑と考えることは不可能ではないが、断定できない。

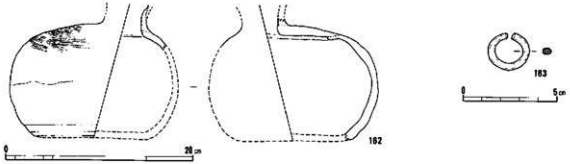
D．出土遺物（第34図、第6・7表）

須恵器平瓶(162)　墓坑と考えられる土坑から破片となって出土した。接合できない破片もあるが、口頸部片は出土しなかった。

耳環(163)　8号墳の表土出土で、銅芯のみである。金か銀が張ってあったと思われる。



第33図　8号墳外形測量図（1：200）



第34図　8号墳出土遺物実測図（160＝1：4，161＝1：2）

9．9号墳

1号墳の北東約12m、2号墳からは林道を挟んで南西へ4mの松林にある。径7～8mの円墳と思われるが、墳丘は低平で不明瞭である。主体部や出土遺物については全く知られていない。

5．結　　語

1．はじめに

今回の調査では6基の古墳が発掘され、5基の石室が検出された。そのうち、1号墳の石室の規模および石材の大きさは、伊勢湾西岸地域で発掘調査されたものの中では最大級のものである。その石室内から出土した遺物に金や銀が使用されたものが多いこととも合わせて考えると、被葬者の力の大きさを推測することができる。

本来ならば、この1号墳の横穴式石室やその被葬者についてのより深い考察を結語として述べるべきであろうが、ここでは発掘調査を実施した古墳の中で8号墳を除く5基の古墳の築造時期に触れることで結語としたい。

2．各古墳の時期

1号墳

石室床面から出土した剣菱形杏葉(42～44)は、楕円部の縁金に逆二角形の突出が垂下されるという新しい時期の特徴をもつ。立聞を含めた全長が22cmと大型で、縁金の鋲数も70個近い。坂本美夫氏の編年[6]によると、この形態のものは剣菱形杏葉の中では最も新しい時期の6世紀第2四半世紀頃のものとされている。断面扁円形の鉢部をもつ雲珠(45)も6世紀代のもので杏葉と矛盾せず、さらに、この形態の雲珠に刻み目をもつ責金具(48～51)がつくのは6世紀前半に多いという傾向がみられる[7]。

鉄鏃には、わずか1点の残片であるが、頸部に片逆刺をもつ長頸鏃(30)がある。杉山秀宏氏は、この形態をもつ長頸鏃は杉山編年のⅦ～Ⅷ期を中心として盛行しⅨ期の前半には消滅するとしている[8]。この時期は5世紀の末頃から6世紀の前半に相当する。

石室出土の古墳時代の遺物に関しては、馬具や鉄鏃からみた時期と明らかに異なる時期のものといえるものはない。

石室の形態は、羨道が短く石材の積み方が玄室と大きく異なる、玄室の平面形が長大化していないなど、6世紀前半代の特徴をもっている。巨大な石材を使用していることを考えあわせると、6世紀前半でも新しい方のものといえる。

このようなことから、1号墳の築造時期は6世紀第2四半期と限定してよいと思われる。

3号墳・5号墳

3号墳は小横穴式石室、5号墳は小竪穴式石室と呼ばれる形態の石室で、7世紀代によく見られる。3号墳は石室内から中村浩氏の陶邑編年[9]のⅡ型式6段階に相当する須恵器杯身(150)・平瓶(151)が出土していることから7世紀前半から中頃にかけて築造されたものと思われる。5号墳もおそらく同じような時期に築造されたものであろう。

6号墳・7号墳

6号墳の石室内から出土した須恵器蓋杯(156～158)は、7世紀前半から中頃の垣内田10号墳[10]から出土した須恵器蓋杯A類にきわめて類似している。石室

の形態は垣内田10号墳よりやや古い要素を残しており、6号墳の築造時期を7世紀前半としてあやまりはないであろう。7号墳の横穴式石室は無袖で、玄室の平面形は6号墳よりも細長くなっていることから、7号墳は6号墳より新しいと考えられる。

3．まとめ

各古墳の時期をまとめると、1号墳のみが6世紀の第2四半期という古い時期に比定され、7世紀前半から中頃という新しい時期に築かれた他の古墳とは大きく異なるという結果になった。天保古墳群において、6世紀後半に古墳の築造が中断されたと考えれば、1号墳は、石室の規模、副葬品の量と質、そして築造時期までが他の古墳と隔絶されたものということになる。大保古墳群については、1号墳より墳丘規模が大きい2号墳・4号墳の検討はもちろんのこと、調査区外にも発見されていない古墳が存在している可能性があることをふまえて考えていかなければならない。結論に、関連する地域のより詳細な課金をまたざるをえないであろう。

（前川嘉宏・野田修久）

	古墳名	所在地	墳形・規模	主体部	時期	出土遺物	伴出銘板	(註・参考文献)
合	井田川茶臼山古墳	亀山市井田川町	円（前方後円？）径30m	横穴式石室石棺	6世紀前半	鉄製形 櫛？形（忍冬文）	1字径 櫛？形（十字文）	⑭
墨	長子里1号墳	鈴鹿市国府町	双円？ 竿50m		6世紀中頃	鉄製形？ 櫛？形（三葉文）		⑮
	天保1号墳	一志郡雲野町島田	円 径15m	横穴式石室	6世紀前半	鉄製形		
	山部2号墳	松阪市山部町	円	木棺埋葬	6世紀中頃	櫛形（二葉文）	板状立聞金具	⑯
	前山1号墳	阿山郡大山田村富岡	円 径12m	横穴式石室	6世紀末葉	鏡形	鏡形	⑰
	キラ上古墳	阿山郡阿山町	前方後円 全長50m		6世紀初頭	剣菱形		⑱
	和古墳	志摩郡大王町畔名	前方後円 全長32.4m	横穴式石室？	7世紀初頭？	櫛円形		⑲

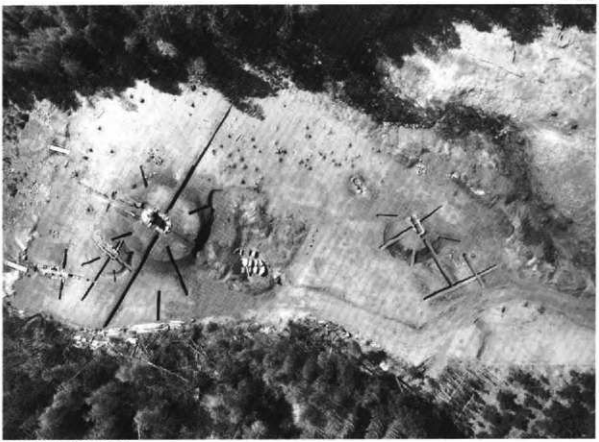
	古墳名	所在地	墳形・規模	主体部	時期	鞍・胡簶	(註・参考文献)
鞍・胡簶	井田川茶臼山古墳	亀山市井田川町	円（前方後円？）径20m	横穴式石室石棺	6世紀前半	胡簶金具（天保1号墳で鞍飾金具としたものと類似）	⑭
	能褒古墳	鈴鹿市中瀬古町	帆立貝式 全長35.7m	粘土槨	5世紀前半	胡簶鋲帽？	⑳
	天保1号墳	一志郡雲野町島田	円 径15m	横穴式石室	6世紀前半	胡簶飾金具・鞍飾金具	
	石山古墳	上野市才良	前方後円 全長120m	粘土槨	4世紀後半	鞍 （彩色文様が施された革製）	㉑

	古墳名	所在地	墳形・規模	主体部	時期	鈴 f	(註・参考文献)
鈴子	天保1号墳	一志郡雲野町島田	円 径15m	横穴式石室	6世紀前半	鈴鈴。長さ 9.0m？	
	久米山5号墳	上野市久米山	円	横穴式石室	6世紀後半？	鈴鈴。長さ 7.3cm	㉒

第8表　三重県内の杏葉・鞍・胡簶・鈴子出土古墳一覧

〔註・参考文献〕

① 伊勢野久好「三重県の前方後方墳」『古代』第86号　早稲田大学考古学会 1988
伊勢野氏は雲出川下流左岸に存在していた大堀口古墳（久居市）も前方後方墳であったと推定している。
② 山崎信政・橋本賢治「西野7号墳」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊4　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
③ 粘土槨を主体部としていたとされ、鏡と鞍金具石が出土していないが、現在は消滅しており詳細は不明である。
④ 下村登良男「八幡田古墳群発掘調査報告書」松阪市教育委員会 1981
⑤ 『三重の遺跡』日本考古学協会秋季大会三重県実行委員会 1978
⑥ 天保1号墳の石室は雲野町立雲野中学の校庭に移築されている。
⑦ 天保古墳群の出土遺物については、三重大学教授八賀晋氏ならびに奈良大学松敏授西山要一氏に多くの御教示をいただいた。
⑧ 天保3号墳の石室内土については三重県農業技術センターにリン・カルシウム分析を依頼し、埋葬人体の存在が確認された。
⑨ 坂本美夫「馬具」考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社 1985
⑩ 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『横浜考古学研究所論集』第7　吉川弘文館 1984
⑪ 中村 浩「陶色土」『大阪文化財センター 1980
⑫ 前川嘉宏「垣内田古墳群」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊2　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990
⑬ 小笠道明「井田川茶臼山古墳」三重県教育委員会 1988
⑭ 『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（近畿Ⅰ）』東京国立博物館 1988
⑮ 松阪市教育委員会の御厚意により実見させていただいた。
⑯ 三重県埋蔵文化財センターが調査している。
⑰ 「故さとの歩み　阿山町』阿山町教育委員会 1980
⑱ 真田幸成「能褒古墳」『四鈴学術調査遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会 1951
⑲ 小林行雄「三重県石口古墳調査略報」『日本考古学協会第8回総会研究発表要旨』1951
⑳ 佐藤正則「古墳時代の鞍了・鞍了について」『河内太平寺古墳群』河内考古刊行会 1979
㉑ ⑩に同じ。

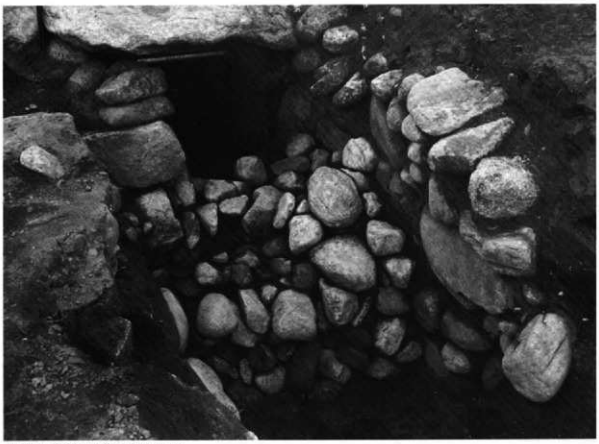


調査区全景（上空から）

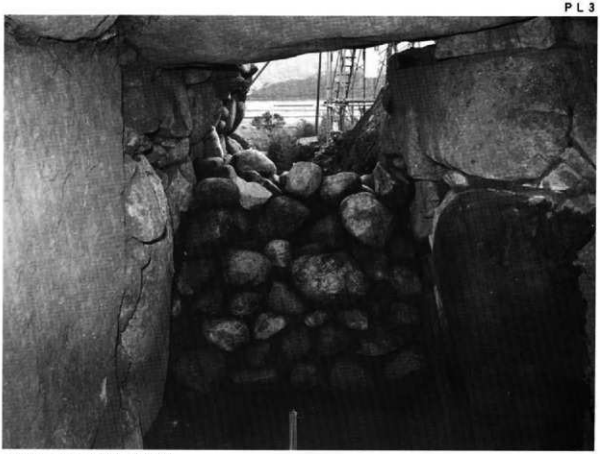
1号墳　調査前全景（北西から）

PL2

1号墳　表土除去後全景（南から）



1号墳　羨道と閉塞石（南西から）

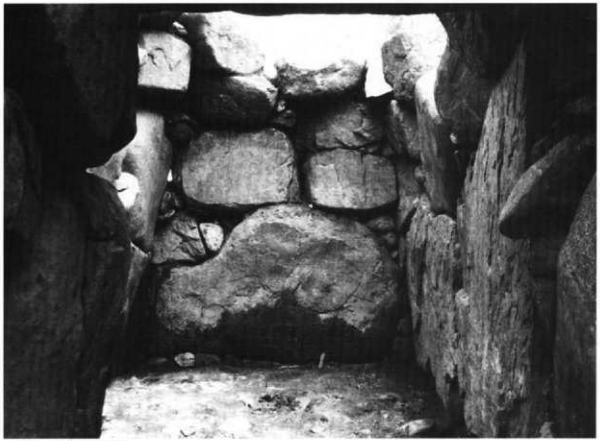


1号墳　羨道と閉塞石（北から）

1号墳　閉塞石最下段（北から）

PL4

1号墳　玄門（北から）



1号墳　奥壁（南から）

1号墳　奥壁と東側壁（南南西から）

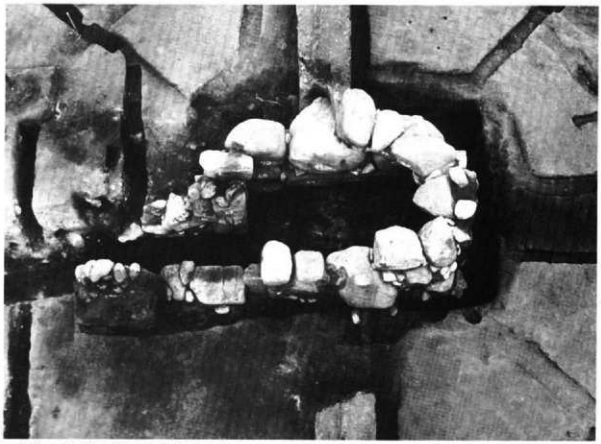
1号墳　奥壁と西側壁（南南東から）

PL6

1号墳　墳丘断ち割り後全景（南から）

1号墳　墳丘断ち割り後全景（北から）

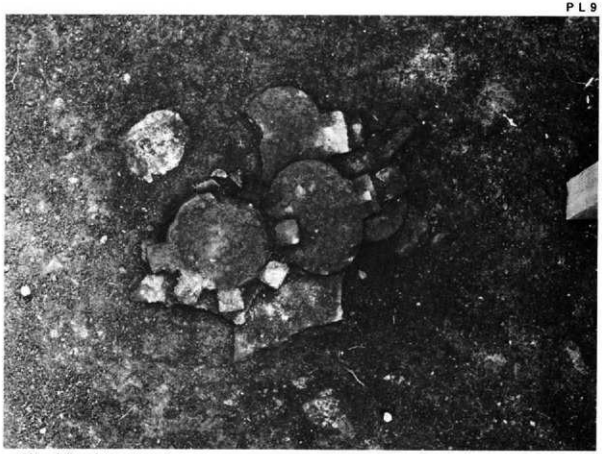
1号墳　天井石除去後石室全景（南から）



1号墳　天井石除去後石室全景（東上から）

1号墳　羨道東側壁（西から）

1号墳　墳丘土層断面（北東から）



1号墳　杏葉・雲珠出土状況（西から）

1号墳　石室材除去作業

PL10

1号墳　石室基底石全景（上から）

1号墳　石室基底石全景（南から）

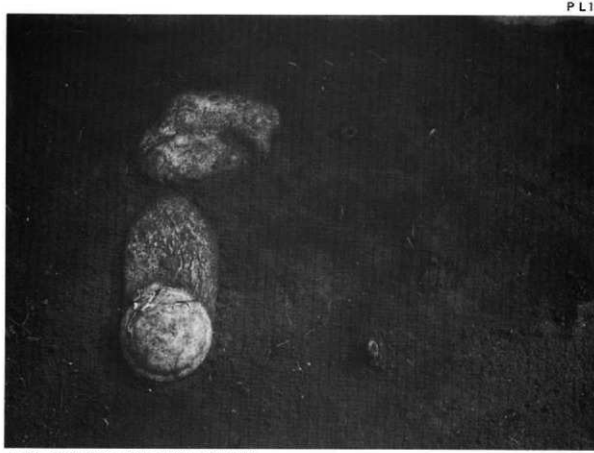
1号墳　石室掘形全景（南から）

嬉野町立嬉野中学校校庭へ移築中の1号墳石室

PL12

3号墳　全景（南東から）

3号墳　石室全景（南東から）



3号墳　須恵器杯身・耳環出土状況（北西から）

3号墳　床土除去後の石室全景（南西から）

5号墳　石室全景（南から）

5号墳　石室全景（東から）

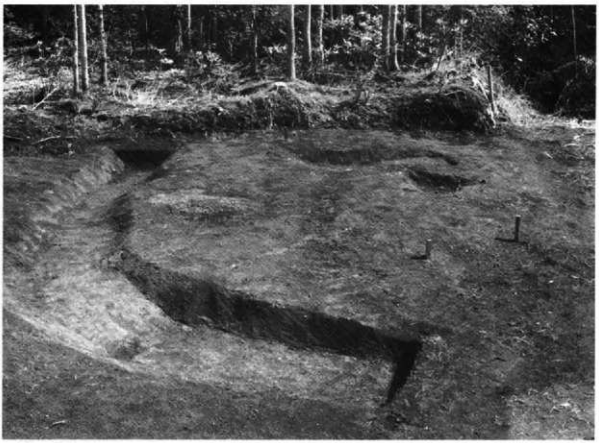
6号墳　石室全景（南南東から）

6号墳　石室基底石全景（北北西から）

6号墳　玄室全景（南南東から）

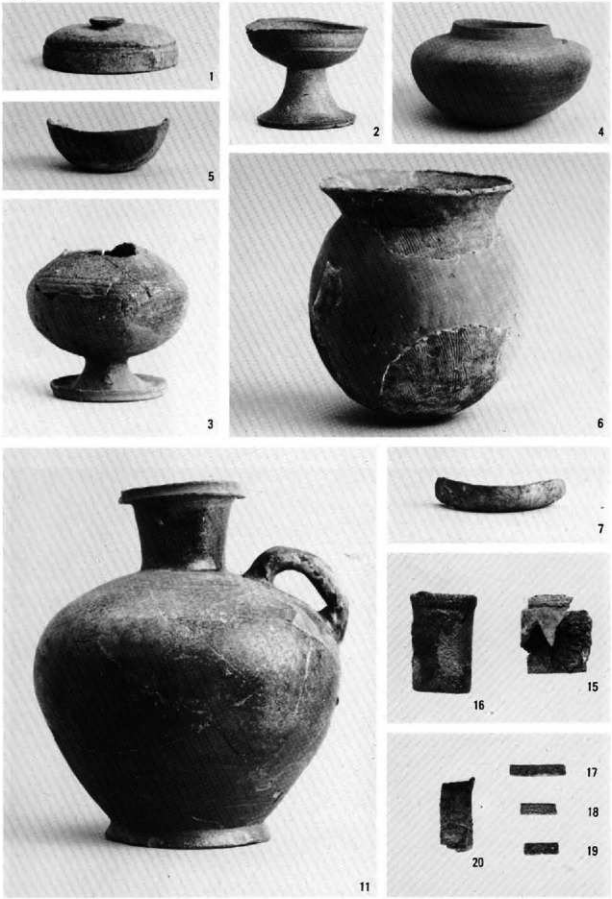
7号墳　全景（南西から）

7号墳　石室掘形全景（南西から）

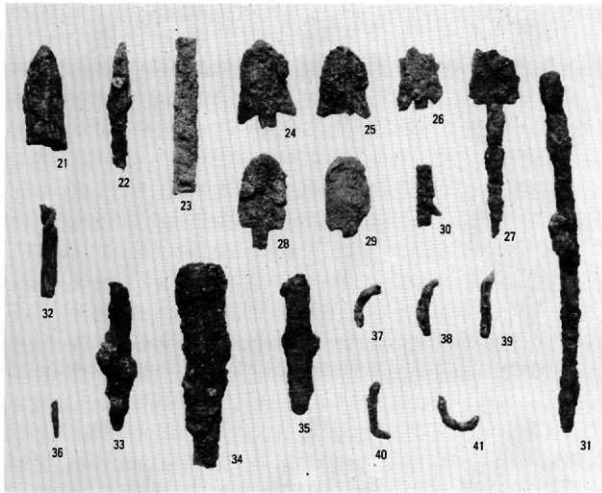


8号墳　全景（西から）

PL18



1号墳出土遺物（1～7・11＝1：3，15～20＝1：2）



保存処理前

保存処理後（表）

保存処理後（裏）

1号墳出土遺物（21～41＝1：2，42＝1：3）

保存処理前

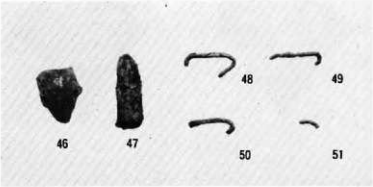
保存処理後（表）

保存処理後（裏）

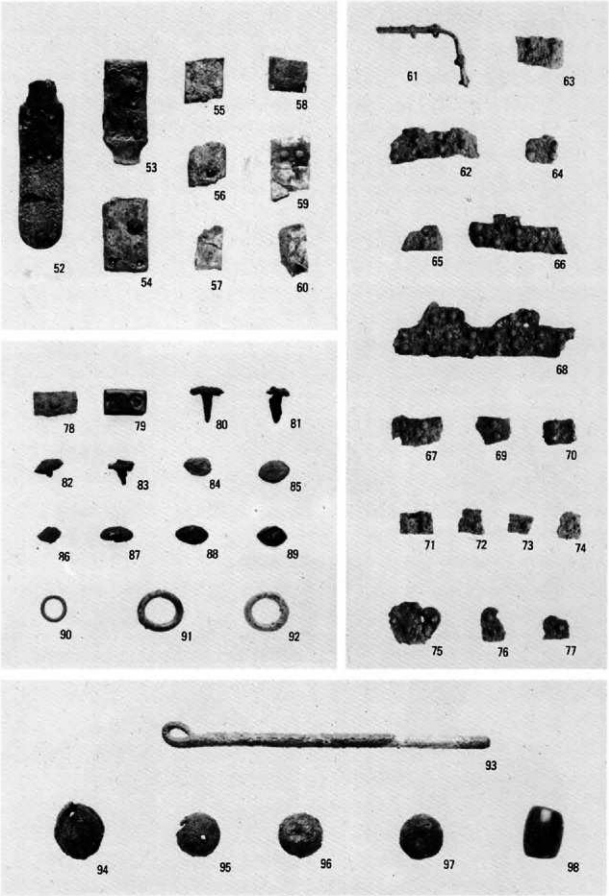
保存処理前

保存処理後（表）

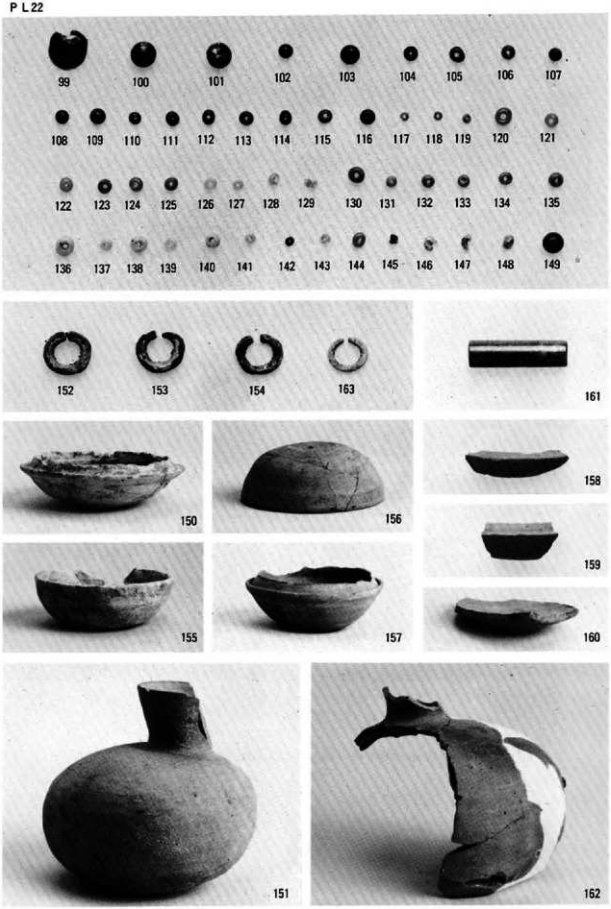
保存処理後（裏）



1号墳出土遺物（43～45＝1：3，46～51＝1：2）



1号墳出土遺物（52～92＝1：2，93～98＝1：1）



調査古墳出土遺物（玉類＝1：1，耳環＝1：2，土器＝1：4）

― 天保３号墳土壌分析結果報告 ―

三重県農業技術センター生産環境部
広　瀬　和　久
原　　正　之

1．目　的

天保３号墳の発掘に当たり、横穴式石室床面埋土の土壌分析を行い、人体埋葬の有無、および埋葬位置を推定することを目的とする。

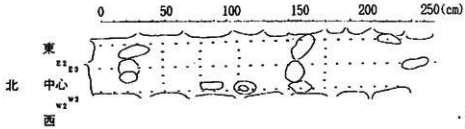
2．分析法法

(1)　分析方法

・カルシウム（Ｃａ）：試料を風乾後乾式灰化し、塩酸で抽出後、原子吸光度法で測定した。

・リン（Ｐ）：試料を風乾後乾式灰化し、塩酸で抽出後、アスコルビン酸法により比色定量した。

(2)　土壌採取法および採取地点



採取地点は上図に示す通りであり、北側壁面から10cm間隔に、石室中心および両側について床面土層底部を採取した。また、北面から50cm、80cm、110cm、180cmの４地点については、中心線から両側に10cm間隔に２地点ずつ同様に採取した。

3．結果および考察

発掘された石室内に、人体が埋葬されていた場合、人骨は分解されにくく比較的残存し易いと考えられる。そこで、骨の主要構成成分であるリンおよびカルシウムについて、石室床面の埋土土壌における濃度分布を調査した。

リンについては側壁に沿ったＥ０～Ｅ24およびＷ０～W24のサンプルについては、ほぼ100～150ppmの範囲にあり、大きな地点間の差および一定の傾向は認められなかった。しかし、中心線上のＣ４～Ｃ18の範囲とＥⅡ、ＥⅢおよびWⅢの１～３の各地点については、150～450ppmと、明らかに他の地点に比べ高い値を示した。これらの地点は、石室内対照土壌（Blank）の値（107ppm）の1.5倍以上であること、また高い値を示す地点が連続的であることから人骨の影響によるものと推察された。

カルシウムについては、各地点とも90～130ppmの範囲にあり、リン濃度の高い地点においても他の地点に比べ大きな差および一定の傾向は認められなかった。これは、石室床面が現状の表土から比較的浅かったため、流失し易いカルシウムは雨水の浸透による溶脱を受けたものと推察された。

以上の結果、石室内における人体埋葬推定位置は第４図に示したように、Ｃ４（北壁から30cm）からＣ18（同170cm）を中心とし、東側20cm、西側10cmの範囲であり、採土間隔が10cmであることから、身長は最小140cm、最大160cmであったと推定された。なおＥⅡ―１およびWⅢ―１の両地点から耳環が検出されたことなど、副葬品の検出位置と埋葬推定位置とは良く一致した。

4．分析結果

第１表　リンおよびカルシウム分析結果　—中　心—

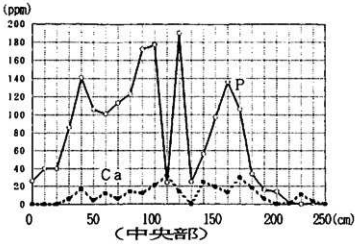
No	北端からの距離 (cm)	Ca (ppm) 分析値	Ca (ppm) -Blank	P (ppm) 分析値	P (ppm) -Blank	No	北端からの距離 (cm)	Ca (ppm) 分析値	Ca (ppm) -Blank	P (ppm) 分析値	P (ppm) -Blank
C－1	0	87	－8	133	26	C－14	130	87	－8	132	25
C－2	10	92	－3	147	40	C－15	140	120	25	163	56
C－3	20	－－	－－			C－16	150	114	19	204	97
C－4	30	101	6	193	86	C－17	160	108	13	243	136
C－5	40	112	17	248	141	C－18	170	125	30	213	106
C－6	50	99	4	213	106	C－19	180	113	18	141	34
C－7	60	107	12	208	101	C－20	190	101	6	123	16
C－8	70	101	6	220	113	C－21	200	90	－5	121	14
C－9	80	109	14	230	123	C－22	210	96	1	109	2
C－10	90	107	12	279	172	C－23	220	106	11	98	－9
C－11	100	116	21	284	177	C－24	230	98	3	108	1
C－12	110	127	32	131	24	C－25	240	90	－5	102	－5
C－13	120	109	14	297	190						

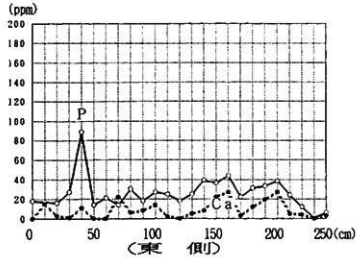
第２表　リンおよびカルシウム分析結果　—東　側—

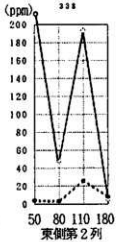
No	北端からの距離 (cm)	Ca (ppm) 分析値	Ca (ppm) -Blank	P (ppm) 分析値	P (ppm) -Blank	No	北端からの距離 (cm)	Ca (ppm) 分析値	Ca (ppm) -Blank	P (ppm) 分析値	P (ppm) -Blank
E－1	0	92	－3	125	18	E－18	170	98	3	129	22
E－2	10	110	15	124	17	E－19	180	107	12	138	31
E－3	20	98	3	123	16	E－20	190	114	19	140	33
E－4	30	96	1	134	27	E－21	200	122	27	145	38
E－5	40	106	11	196	89	E－22	210	100	5	131	24
E－6	50	93	－2	121	14	E－23	220	99	4	119	12
E－7	60	92	－3	129	21	E－24	230	89	－6	108	1
E－8	70	117	22	121	14	E－25	240	98	3	113	6
E－9	80	101	6	137	30						
E－10	90	103	8	125	18	EⅡ-1	50	99	4	445	338
E－11	100	109	14	134	27	EⅡ-2	80	98	3	155	48
E－12	110	97	2	132	25	EⅡ-3	110	121	26	300	193
E－13	120	93	－2	125	18	EⅡ-4	180	103	8	112	5
E－14	130	100	5	132	25	EⅢ-1	50	103	8	291	184
E－15	140	103	8	146	39	EⅢ-2	80	114	19	291	184
E－16	150	117	22	143	36	EⅢ-3	110	112	17	281	174
E－17	160	122	27	151	44	EⅢ-4	180	102	7	144	37

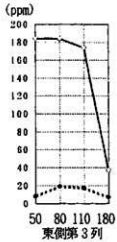
第３表　リンおよびカルシウム分析結果　—西　側—

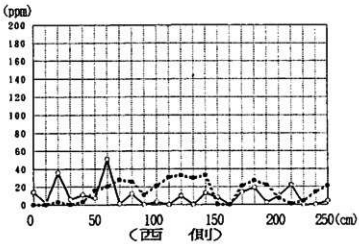
No	北端からの距離 (cm)	Ca (ppm) 分析値	Ca (ppm) -Blank	P (ppm) 分析値	P (ppm) -Blank	No	北端からの距離 (cm)	Ca (ppm) 分析値	Ca (ppm) -Blank	P (ppm) 分析値	P (ppm) -Blank
W－1	0	93	－2	121	14	W－18	170	116	21	121	14
W－2	10	94	－1	109	2	W－19	180	122	27	126	19
W－3	20	101	3	143	36	W－20	190	117	22	109	2
W－4	30	94	－1	116	6	W－21	200	102	7	117	10
W－5	40	98	3	118	11	W－22	210	96	1	129	22
W－6	50	111	16	114	7	W－23	220	99	4	76	－31
W－7	60	115	20	158	51	W－24	230	109	14	99	－8
W－8	70	123	28	108	1	W－25	240	116	21	111	4
W－9	80	121	26	119	12						
W－10	90	106	11	105	－2	WⅡ-1	50	110	15	137	30
W－11	100	116	21	110	3	WⅡ-2	80	120	25	119	12
W－12	110	126	31	101	－6	WⅡ-3	110	120	25	145	38
W－13	120	128	33	117	10	WⅡ-4	180	118	23	126	19
W－14	130	125	30	71	－36	WⅢ-1	50	146	51	297	190
W－15	140	128	33	120	13	WⅢ-2	80	106	11	227	120
W－16	150	90	－5	115	8	WⅢ-3	110	118	23	273	166
W－17	160	―――	―――	―――	―――	WⅢ-4	180	118	23	127	20

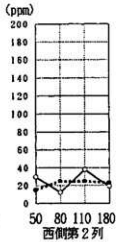

(ppm)
P
Ca
0 50 100 150 200 250(cm)
(中央部)

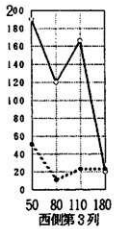

(ppm)
P
Ca
0 50 100 150 200 250(cm)
(東 側)

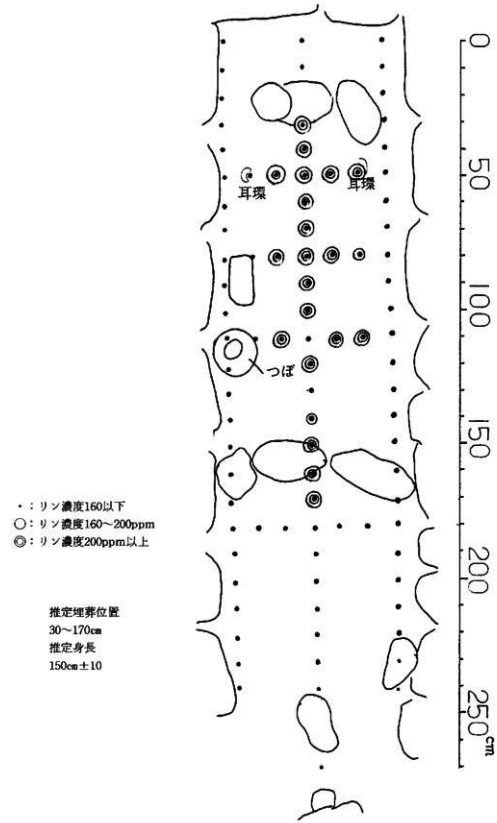

(ppm)
50 80 110 180
東側第2列


(ppm)
50 80 110 180
東側第3列


(ppm)
0 50 100 150 200 250(cm)
(西 側)


(ppm)
50 80 110 180
西側第2列


50 80 110 180
西側第3列



第4図　石室内における人体埋葬推定位置

平成3(1991)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-9

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

── 第3分冊 3 ──

1991(平成3)年3月31日

編集　三重県教育委員会
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　オリエンタル印刷株式会社